広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第50集

青木原遺跡発掘調査報告書

1986

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

青木原遺跡発掘調査報告書

1986

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

例　　言

1．本書は，昭和59（1984）年度に千代田町農業協同組合から委託を受け，財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した新生産総合振興対策事業に係る青木原（あおきばら）遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は，調査研究員の鍜治益生，唐口勉三（現広島県立埋蔵文化財センター調査研究員）が行った。

3．遺構，遺物の実測，写真撮影は上記の者が行い，本書の執筆，編集は鍜治が行った。

4．本書に使用した遺構略記号は次のとおりである。

ＳＢ：住居跡・住居跡状遺構・掘立柱建物跡，ＳＫ：土壙，ＳＤ：溝状遺構，Ｐ：柱穴，ＳＸ：その他

5．挿図と図版の遺物番号は，同一である。

6．本文中に用いた方位は，すべて磁北である。

7．本書に掲載した第１図は，建設省国土地理院発行の１：25,000の地形図（八重・佐々井）を使用した。

目　　次

Ⅰ　はじめに …… (1)
Ⅱ　位置と環境 …… (2)
Ⅲ　遺構と遺物 …… (6)
Ⅳ　まとめ …… (29)

図版目次

図版 1-a　遺跡遠景　(北西から)
b　調査状況　(南から)
c　同上　(北から)
図版 2-a　調査後全景　(北東から)
b　SB02・03・07完掘状況　(西から)
c　調査区北東部完掘状況　(南から)
図版 3-a　SB01検出状況　(東から)
b　同上　調査状況　(東から)
c　同上　完掘状況　(北から)
図版 4-a　SB02検出状況　(東から)
b　同上　完掘状況　(南から)
c　同上　カマド検出状況
d　同上　完掘状況　(南から)
図版 5-a　SB03検出状況　(西から)
b　同上　完掘状況　(西から)
図版 6-a　SB06完掘状況　(西から)
b　同上　土器出土状況
c　同上
図版 7-a　SB07調査状況
b　同上　完掘状況　(西から)
c　同上　カマド検出状況　(西から)
図版 8-a　SB08完掘状況　(西から)
b　SB09完掘状況　(東から)
c　SB10完掘状況　(東から)
図版 9-a　SB05完掘状況　(南から)
b　SK04土器出土状況　(西から)
図版 10　出土遺物(Ⅰ)
図版 11　出土遺物(Ⅱ)
図版 12　出土遺物(Ⅲ)
図版 13　出土遺物(Ⅳ)

挿　図　目　次

第１図　周辺主要遺跡分布図　（１:25,000）……（２）
第２図　遺跡周辺地形図　（１:2,500）……（５）
第３図　遺跡地形図　（１:1,000）……（６）
第４図　遺構配置図及び調査区設定図　（１:300）……（７）
第５図　ＳＢ01実測図　（１:60）……（９）
第６図　ＳＢ01出土土器実測図・拓影（１:３）……（９）
第７図　ＳＢ02実測図　（１:60）……(10)
第８図　ＳＢ02カマド実測図　（１:30）……(11)
第９図　ＳＢ02出土土器実測図　（１:３）……(12)
第10図　ＳＢ02出土石器実測図　（１:２）……(13)
第11図　ＳＢ03実測図　（１:60）……(14)
第12図　ＳＢ03出土土器実測図　（１:３）……(15)
第13図　ＳＢ03出土土製紡錘車・鉄器実測図　（１:２）……(15)
第14図　ＳＢ04実測図　（１:60）……(16)
第15図　ＳＢ05実測図　（１:60）……(17)
第16図　ＳＢ05出土土器実測図　（１:３）……(17)
第17図　ＳＢ06出土土器実測図　（１:３）……(18)
第18図　ＳＢ07実測図　（１:60）……(19)
第19図　ＳＢ07カマド実測図　（１:30）……(19)
第20図　ＳＢ07出土土器実測図　（１:３）……(20)
第21図　ＳＢ06・08実測図　（１:60）……(21)
第22図　ＳＢ06・08断面図　（１:60）……(22)
第23図　ＳＢ09・10実測図　（１:60）……(23)
第24図　ＳＫ04実測図　（１:20）……(24)
第25図　ＳＫ04出土土器実測図　（１:４）……(24)
第26図　遺構に伴わない遺物実測図・拓影（I）（１:３）……(27)
第27図　遺構に伴わない遺物実測図（II）（１:３）……(28)

I はじめに

山県郡千代田町は，広島市の北側に位置する中国山地の山間部にある町であるが，古くから山陽側と山陰側の島根県石見地方を結ぶ交通上の要地として知られている。町内の約8割は山林で，沖積地は江の川とその支流域に展開している。主要な産業は農林業であるが，中国自動車道が町内を通過し，インターチェンジが設けられて交通体系が一変し，県及び町によって工業団地造成が進められているなど，今後の発展が期待されている。

ところで，県内では近年，農用地の効率利用・農業就業者の高齢化・農業機械の過剰投資等が問題となっている。この解決策としてほ場整備の推進等により，生産性の向上，経営の合理化を行なうため，関係機関が一体となり農業生産総合振興計画に基づいた地域営農条件整備が推進されている。この一環として農業の機械化・省力化の確立・農家の施設投資の抑制を行なうと共に，農家所得の向上等と良質米産地の定着化等を目的とした大規模乾燥調製貯蔵施設の建設が県内各地で行なわれている。千代田町においても千代田町農業協同組合(以下「千代田町農協」という。)が，昭和59(1984)年度に新生産総合振興対策事業として同町有田にこの施設の建設を計画し，昭和58年11月，広島県教育委員会（以下「県教委」という。）に計画予定地約10,000㎡内の文化財の有無について照会があった。県教委は試掘調査を実施した結果，青木原遺跡が約2,500㎡存在することを確認した。

このような経過を経て昭和59年4月，千代田農協から当センターに調査依頼があり，県教委，千代田町農協及び当センターの3者間で協議した結果，構造物が建設される遺跡の南半分1,149㎡について発掘調査を実施し，残りの部分は現存保存することになり，調査は7月9日から9月7日まで実施した。なお，整理作業及び報告書の刊行は昭和60年度に実施することになった。

本報告書はその成果をまとめたものである。同町内における古墳時代の集落跡の調査はこれまでほとんど行なわれていなかったが，この度新しい資料を加えることができた。このような意味からも本報告書が学術研究のみならず，地域の歴史研究に寄与できれば幸いである。

調査にあたっては，広島県教育委員会の指導を得るとともに，千代田町農業協同組合，広島県経済農業協同組合連合会，千代田町教育委員会，芸北民俗芸能保存伝承館及び地元の方々の多大な御協力を得た。記して謝意を表したい。

II 位置と環境

青木原遺跡は，広島県山県郡千代田町大字有田字恵両1253番地外3筆に所在する。

千代田町は，広島市の北側に位置する中国山地の山間部の町で，四方に標高600～800mの山々が連なっている。沖積地は東隣りの八千代町に流下する江の川とその支流である志路原川，冠川，出原川などの河川に沿って形成されている。なお，町の中心地は，前述の江の川に

第1図 周辺主要遺跡分布図（1:25,000）

1. 青木原遺跡
2. 後有田遺跡
3. 城が谷遺跡
4. 有岡谷古墳
5. 城が谷古墳群
6. 有岡谷遺跡
7. 政国古墳群
8. 念城遺跡
9. 須倉政国古墳群
10. 野師遺跡
11. 古保利野師西古墳
12. 古保利古墳群薬師堂裏支群
13. 古保利古墳群岡田支群
14. 古保利古墳群鍛冶屋ヶ市支群
15. 古保利古墳群檜木支群
16. 刈又1号遺跡
17. 刈又2号遺跡
18. 背子山古墳群
19. 飛石古墳群
20. 壬生神社遺跡
21. 山根古墳群
22. 塚迫遺跡群
23. 金子古墳群
24. 大国古墳
25. 中出勝負峠墳墓群
26. 歳ノ神遺跡群
27. 古土井古墳
28. 養老温泉裏遺跡
29. 国藤古墳群
30. 天津古墳
31. 栗貞古墳
32. 三ッ塚古墳

志路原川，冠川が合流する一帯で，町並は八重及び壬生の2箇所にあり，町役場や本遺跡もこの一角に存在している。また，付近の丘陵上には塚迫遺跡[1]，古保利古墳群[2]，歳ノ神遺跡群[3]や中出勝負峠墳墓群[4]をはじめとする多くの遺跡があり，郡内でもっとも遺跡が密集している。このことは当地域が古代の山県郡の中心地であったことを窺わせる。

ところで，現在町内で確認されている遺跡は約250箇所であるが，その大半は古墳であり，集落跡，生産遺跡は十分明らかにされていない。これらの遺跡は沖積地を臨む低丘陵上などに立地しており，小規模な遺跡が多数を占めているが，最近の調査によって，当地域の原始古代も次第に明らかになりつつある。以下，主に発掘調査で明らかとなった遺跡を中心に本遺跡周辺の歴史的環境を時代別に概観したい。

旧石器時代の遺跡は，現在のところ町内では確認されていないが，縄文時代の遺跡・遺物は本町の北側に位置する大朝町との町境付近や有間の後山で確認されている。

弥生時代の遺跡としては，前期のものに塚迫遺跡，川井遺跡[2]があり，今回調査の青木原遺跡でも当該時期の遺構を確認した。塚迫遺跡は壬生の集落を望む比高約30mの丘陵上に位置し，土壙墓8基，土器棺墓6基から成る集団墓であり，当該時期の集団墓は県下では少ない。また川井遺跡は集落跡と考えられており，小型の壺形土器が出土している。一方，後期の遺跡には昭和59年度に調査された歳ノ神遺跡群内の集落跡と墳墓群[3]，中出勝負峠墳墓群中の3号墓がある[4]。前者の墳墓群は2基の四隅突出型墳墓を含む多数の墳墓で構成される集団墓で，当該地域では四隅突出型墳墓の確認は初例である。また，後者は尾根を長さ17.7m，幅12mで台状に削出した墳墓で，9基の埋葬施設をもち周辺部から後期の土器片が出土した。これらの遺跡は弥生時代から古墳時代への過渡的状況を示す墳墓の資料として注目されている。

古墳時代の遺跡としては，古墳が多数確認されている。古墳は木棺直葬や箱形石棺を内部主体とするものが多く，竪穴式石室や横穴式石室の導入は他地域と比較してやや遅れ，とくに横穴式石室の導入は6世紀後半以降みられる。前半期の古墳には前述の中出勝負峠墳墓群があり，このうち第8号古墳は自然の高まりを利用した古墳で，内部主体は木棺直葬である。棺内からは破砕された状況で青銅鏡が1面出土したほか，鉄器・玉類が出土している。また，墳丘からは畿内における布留式並行の古式土師器が出土しており，本古墳の築造年代は4世紀代と考えられている。また，この古墳よりやや後出的な古墳として，氏神正田遺跡の石棺群がある[5]。この遺跡は無墳丘で3基の箱形石棺と1基の石蓋土壙から成る集団墓であり，前時代的要素を残す古墳と考えられている。このほか，調査した古墳としては城が谷古墳群の1号箱形石棺がある[6]。

一方，竪穴式石室を内部主体とする古墳には金子(かねこ)第2号古墳[7]，塚迫第1，2号古墳[1]，古保利第44号古墳[2]などがある。このうち，金子第2号古墳からは鉄鏃，刀子，鉄斧などの多量の鉄製品のほか，須恵器が出土しており，古保利第44号古墳からは挂甲，馬具，鉄鏃などが出土している。これらの古墳の築造年代は出土遺物から6世紀前半代とされている。

横穴式石室を内部主体とする古墳は町内各地で多数確認されており，一般的に沖積地を望む丘陵斜面に立地し群を構成するものが多い。調査された古墳には有岡谷(ありおかだに)第1号古墳[6]，尾原古墳[8]，蔵迫第2号古墳[9]，石塚第1，2号古墳[10]などがある。有岡谷第1号古墳は玄室床面の一部に須恵器蓋杯を敷いていたが，このような例は江の川水系の高田郡吉田町，高宮町，甲田町の同時期の古墳でも確認されている。尾原古墳からは，須恵器，鉄鏃，直刀，管玉，切子玉などが出土し，三ツ塚古墳からは金銅製の雲珠が出土している[11]。また，これらの古墳よりやや時期の下る石塚第2号古墳からは，鳥形の装飾須恵器が出土している。このほか山陰地方の影響を受けて成立したとみられる横穴墓が南方地区などに少例知られている。

古墳時代の集落跡には後山(うしろやま)遺跡[12]，城が谷遺跡[6]，上日神谷(かみひがみだに)遺跡[13]及び今回調査の青木原遺跡がある。後山遺跡は住居跡3軒が確認されているが，詳細は不明である。城が谷遺跡は方形住居跡1軒が検出されており，出土遺物から6世紀後半頃と考えられている。上日神谷遺跡では住居跡状遺構1，溝状遺構1が検出されており，出土遺物から6世紀末から7世紀初頭頃の遺跡と考えられている。

古代の遺跡については，今回の青木原遺跡の調査で平安時代頃の建物跡を確認しているほか，現在古保利薬師三尊仏が安置される薬師堂付近は，福光寺廃寺跡と伝えられている。

註

(1) 広島県教育委員会「塚迫遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 昭和57 (1982) 年

(2) 龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団『龍岩・古保利・上春木埋蔵文化財発掘調査報告書 ―広島県山県郡大朝町・千代田町所在―』 昭和51 (1976) 年

(3) 昭和59年度，当センターが実施した発掘調査による。報告書は本年度刊行予定

(4) 昭和59年度，広島県教育委員会が実施した発掘調査による。なお，第4～9号古墳は当センターが発掘調査を実施している。報告書は本年度刊行予定

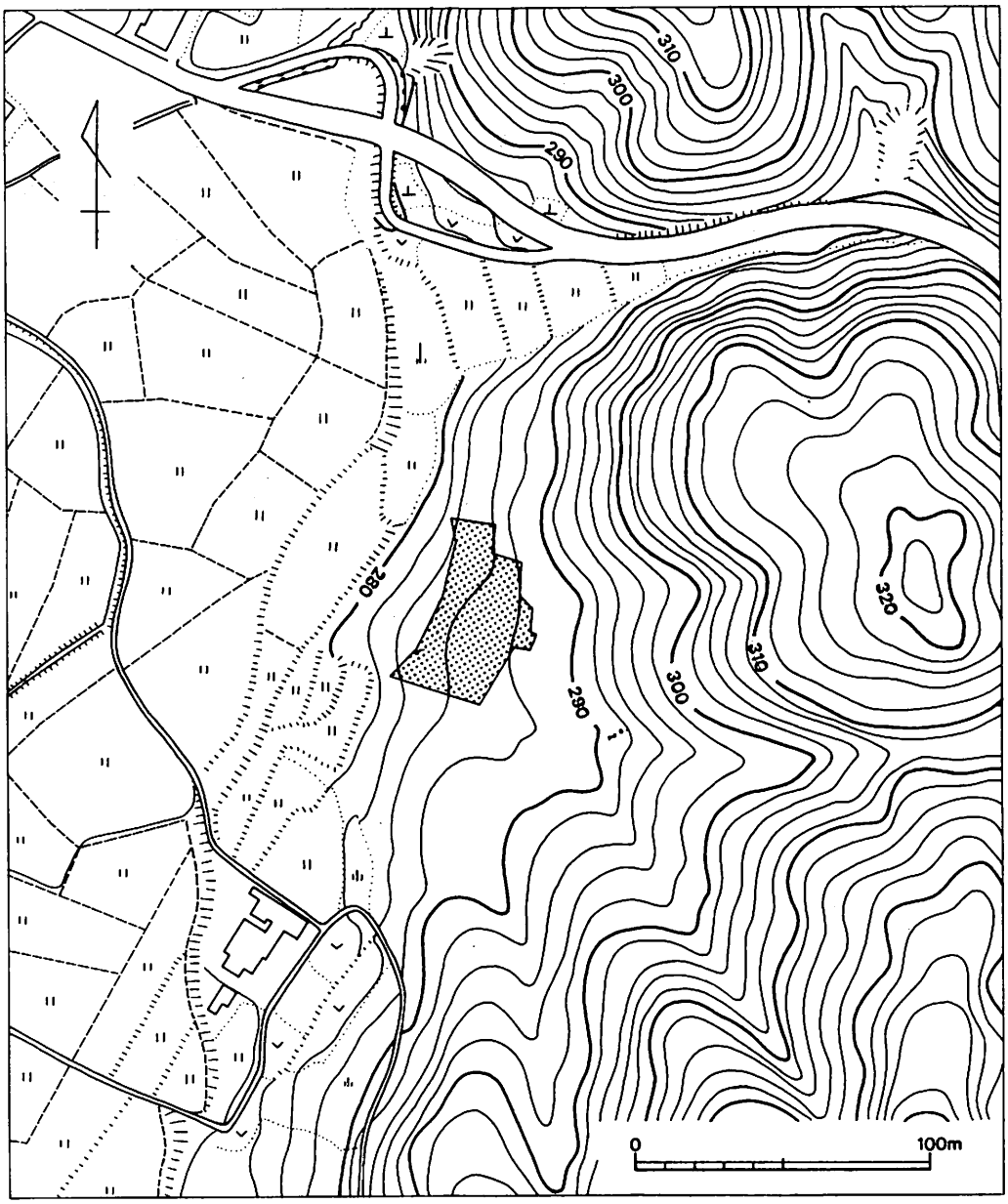
(5) 千代田町教育委員会『氏神正田遺跡』 昭和59 (1984) 年

(6) 広島県教育委員会『城が谷遺跡群発掘調査報告 ―石田工業工場用地造成にかかる―』 昭和48 (1973) 年

(7) 広島県教育委員会「金子古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 昭和57 (1982) 年

(8) 千代田町教育委員会『尾原古墳発掘調査報告』 昭和53 (1978) 年

(9) 熊田重邦，十亀豊一郎，潮見　浩，本村豪章「広島県千代田町蔵迫第2号墳発掘調査報告」『広島女子短期大学研究紀要』第11号，昭和36(1961)年
(10) 広島県教育委員会『石塚古墳発掘調査報告』 昭和49(1974)年
(11) 註(6)による。
(12) 広島県埋蔵文化財分布調査台帳による。
(13) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『上日神谷遺跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第44集　昭和60(1985)年



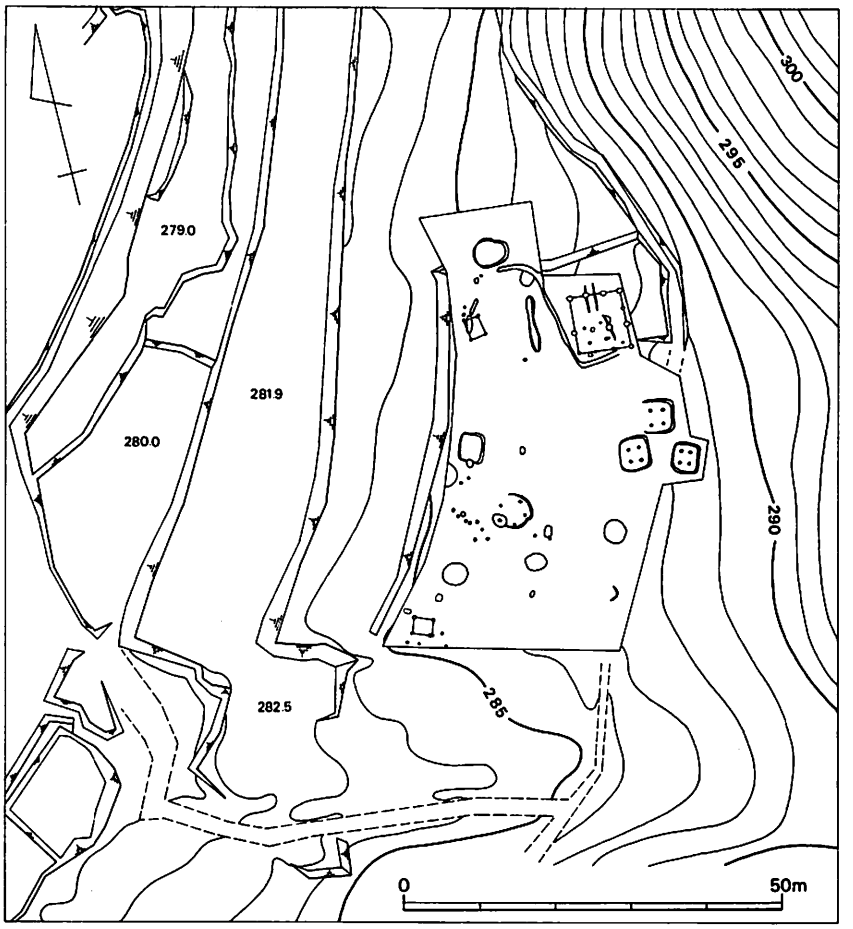
第2図　遺跡周辺地形図（1:2,500）(アミ目：調査区域)

Ⅲ 遺構と遺物

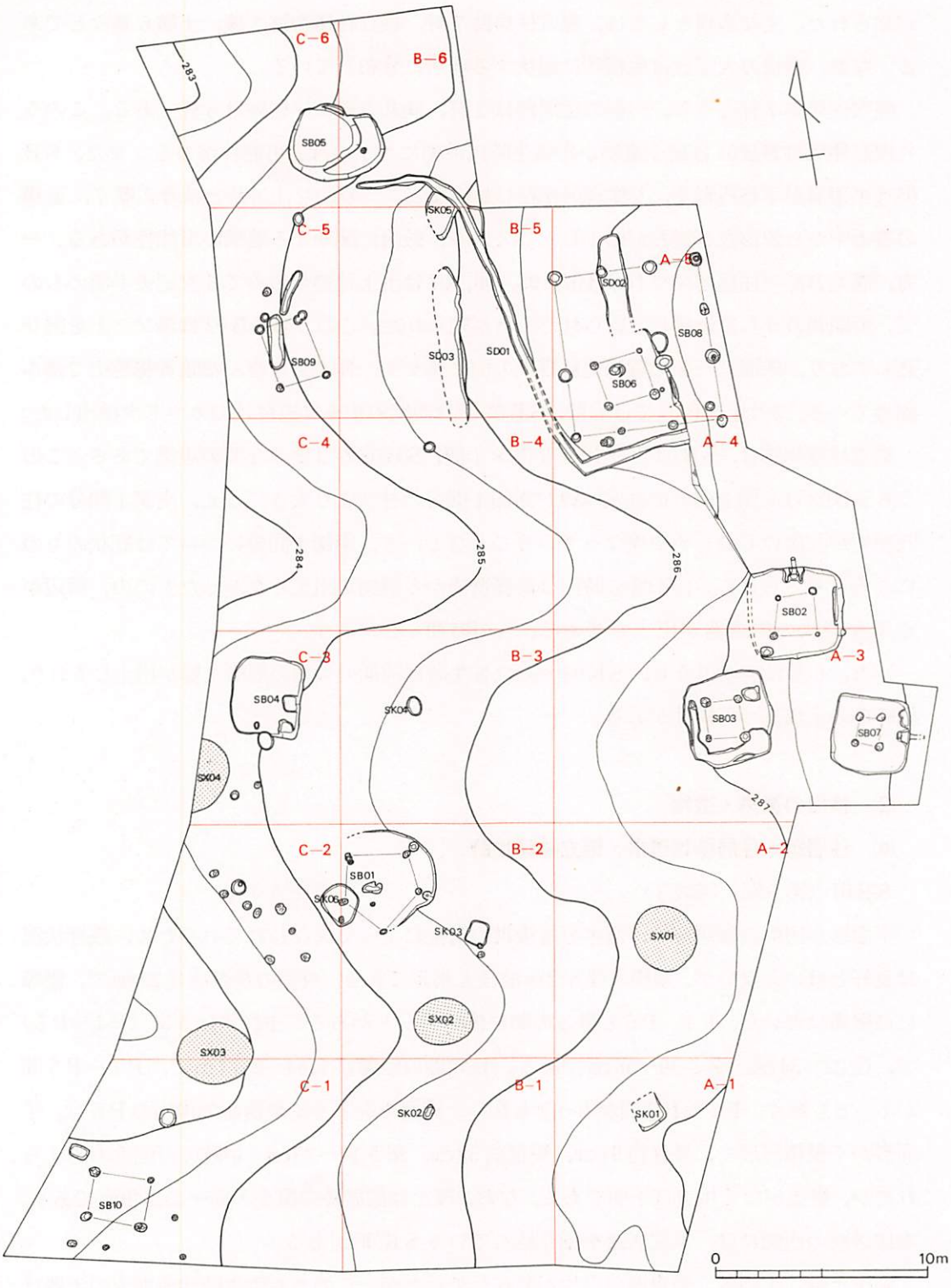
(1) 調査の概要（第3・4図，図版1・2）

青木原遺跡は，江の川の支流冠川の沖積地に面した西向きの低丘陵緩斜面に位置し，標高286～290m付近に立地する。冠川に沿う周辺の水田との比高は約10mで，現状は山林である。

調査は，10m×10mのグリッドを東西方向に3区（A～C区），南北方向に6区（1～6区），計17のグリッドを設定した。現状の地形は緩斜面であるが，調査の結果，3本の小さな谷が貫入し，谷部を中心に多量の黒フク土が堆積していることが明らかになった。遺構検出面は黄褐色土の地山面であるが，遺構は黒フク土中から掘り込んでいること



第3図　遺跡地形図（1:1,000）（数字：標高）



第4図　遺構配置図及び調査区設定図（1:300）（アミ目：風倒木痕）

が知られた。主な遺構としては，竪穴住居跡７軒，掘立柱建物跡３棟，土壙６基などである。なお，遺構の大部分は尾根状に起伏する場所に分布している。

竪穴住居跡７軒のうち，円形の住居跡は２軒，隅丸方形の住居跡は５軒である。このうち円形住居跡ＳＢ01は出土遺物から弥生時代前期にさかのぼる可能性がある。また，ＳＢ05は平面形が不整円形で，主柱穴が存在しないなど，一般的な住居跡とは考え難く，遺構の覆土中から鉄滓及び焼石が出土したことから，鍛冶に関連する遺構の可能性がある。一方，隅丸方形の住居跡のうちＳＢ02，03，06，07は出土遺物からみて６世紀後半頃のもので，短期間のうちに近接して造られたことが知られた。このうちＳＢ02は黒フク土を掘り込んでおり，床面は一部で黄褐色粘質土の面に達せず，地山土を含んだ暗黄褐色土で踏み固めている。また，ＳＢ02では北壁，ＳＢ07では西壁の中央に造付けのカマドを検出した。

掘立柱建物跡は，ＳＢ09及び10が１間×１間，ＳＢ08が３間×３間の規模である。このうちＳＢ08は北側２間分の柱穴規模が南側１間分の柱穴より大きいうえ，南側１間分の柱穴配列が北側のものとやや異なっていることなどから，南側１間分については庇状のものになると考えられる。ＳＢ08の時期は直接遺構から遺物が出土しなかったものの，周辺から平安時代の須恵器が出土しており，この時期とされよう。

一方，６基の土壙のうち，ＳＫ04からは弥生時代前期の大型の壺形土器が出土しており，同時期の土壙墓の可能性がある。

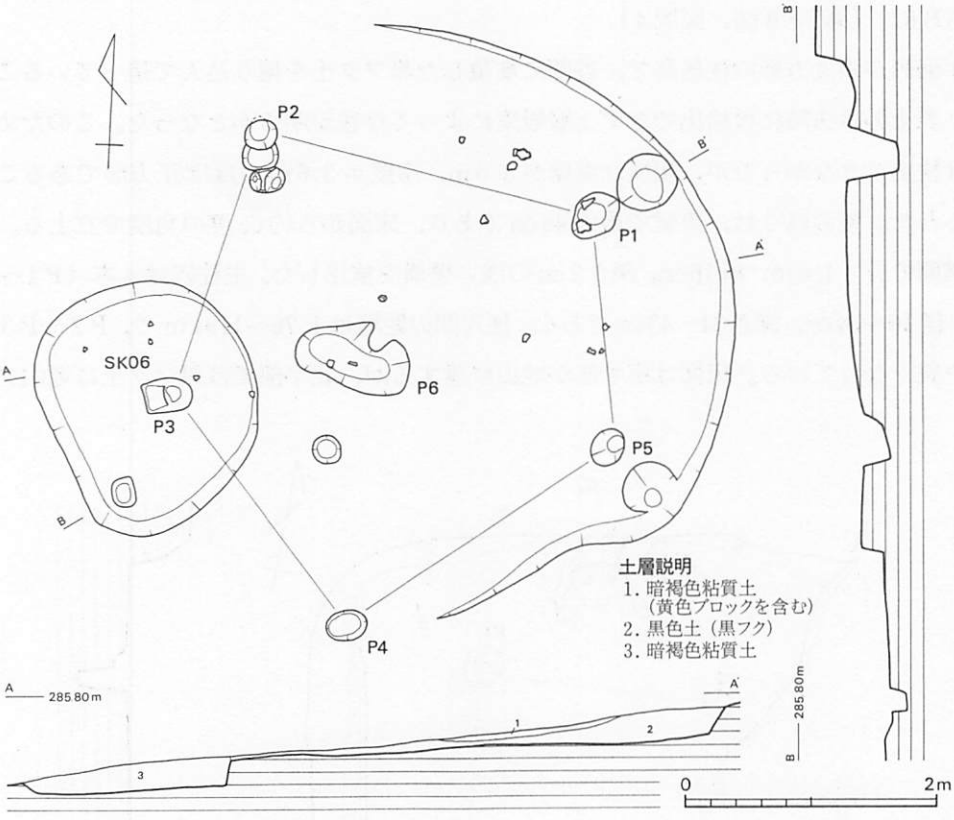
(2) 検出の遺構・遺物

(a) 住居跡・住居跡状遺構・掘立柱建物跡

ＳＢ01（第５図，図版３）

平面形が円形の住居跡で，西半分は後世の攪乱によって失なわれているため，残存状況は良好とはいえないが，規模は径5.2ｍ前後と推定できる。東壁の残存高は23cmで，壁際には壁溝はないが，Ｐ１，Ｐ５と壁との間に浅いピットがある。主柱穴は５本（Ｐ１～Ｐ５）で，径22～34cm，深さ39～58cmである。柱穴間の距離は1.84～2.74ｍで，Ｐ１－Ｐ５間がもっとも短く，Ｐ１－Ｐ２間がもっとも長い。床面中央よりやや西側で検出のＰ６は，平面形が不整楕円形で，長径約94cm，短径約52cm，深さ17～25cm，炉跡の可能性も考えられたが，焼土がなく用途は不明である。なお，覆土は住居跡の覆土と同一の黒色土である。本住居跡の西側には，本住居跡を掘り込んでいるＳＫ06がある。

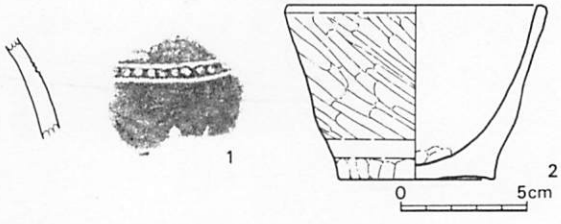
弥生土器，土師器，須恵器の小片が散在していたが，このうち弥生時代前期末の土器は床面直上で出土しており，本住居跡の年代はこの時期の可能性が考えられる。



第5図　SB01実測図（1:60）

出土遺物　（第6図，図版10）

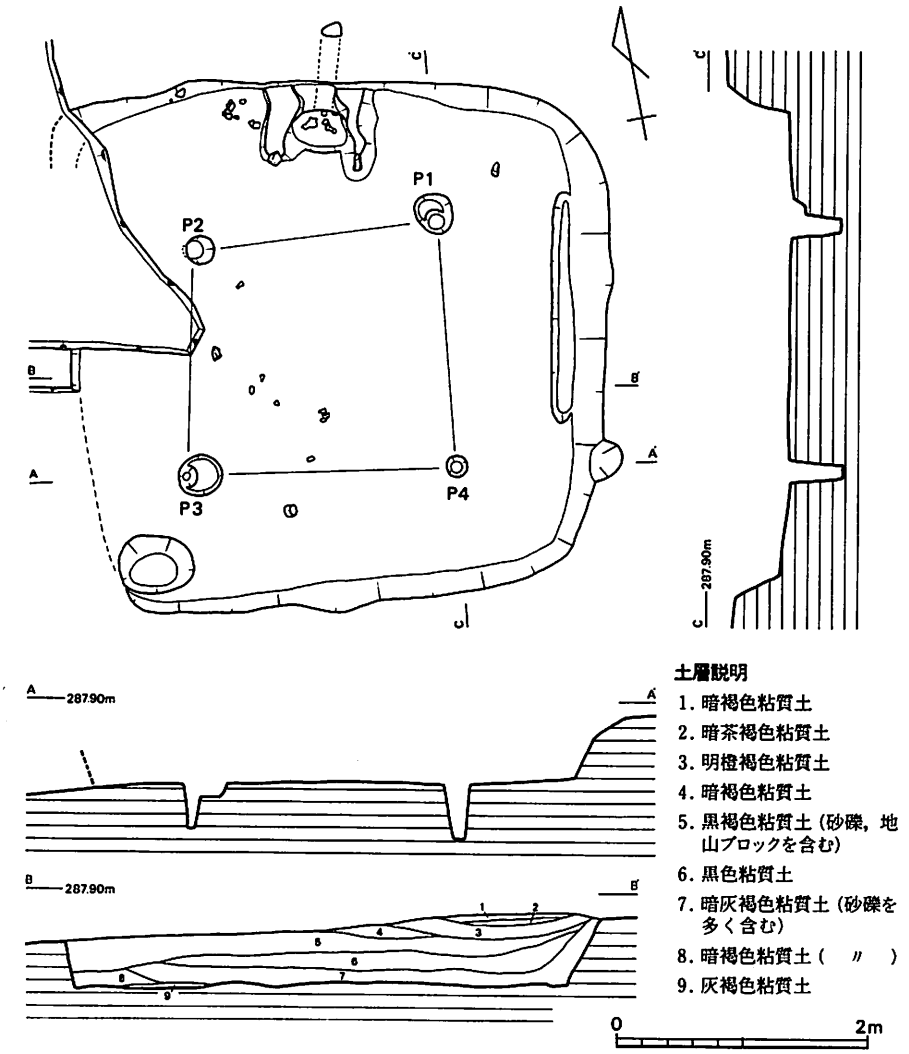
弥生土器　1は壺形土器の肩部付近の破片で，外面にはヘラ描きの沈線を2条廻らし，この間に竹管による刺突文を施している。調整は内外面とも不明瞭であるがナデによると思われる。2は鉢形土器で壺又は甕形土器の底部を転用している。底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ開き，端部は打欠いて矩形を呈している。調整は体部外面斜位のヘラ磨きで，底部との境に指頭圧痕を残している。また底部外面は不定方向のヘラ磨きで，体部及び底部内面はナデによって仕上げている。



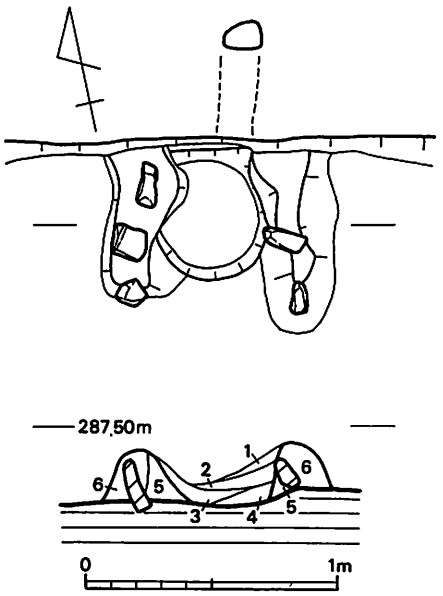
第6図　SB01出土土器実測図・拓影（1:3）

ＳＢ02 （第７・８図，図版４）

平面形が隅丸方形の住居跡で，谷部に堆積した黒フク土を掘り込んで造っていることから，表土の除去時には検出できず土層観察によって存在が明らかとなった。このため北西隅は検出できなかったが，規模は東壁が3.6ｍ，南壁が3.6ｍのほぼ正方形であることが知られた。壁の高さは，東壁で最大48㎝であり，床面から約65度の角度で立上る。なお東壁際で長さ1.8ｍ，幅16㎝，深さ2㎝の浅い壁溝を検出した。主柱穴は４本（Ｐ1～Ｐ4）で，径16～34㎝，深さ34～43㎝である。柱穴間の距離は1.76～1.94ｍで，Ｐ2―Ｐ3間がやや狭くなっている。床面は南半部が地山に達するが，北半部では黒フク土に地山ブロッ



第７図　ＳＢ02実測図（1:60）



土層説明

1. 暗褐色砂質土（炭含）
2. 暗黄褐色砂質土（炭，黄色ブロック含む）
3. 暗褐色砂質土（炭含）
4. 暗黄褐色砂質土（炭，黄色ブロック含む）
5. 赤褐色土
6. 黄褐色土

第8図　SB02カマド実測図（1:30）

クを含んだ暗黄褐色土で貼床されている。また北壁中央でカマドを検出した。カマドの規模は全長1.25m，焚口部は幅90cm，長さ45cm，煙道部で幅15cm，長さ70cmである。カマド本体は床面を若干掘り込んで小型の石を縦長に，東側に2石，西側に3石立てたうえに黄褐色土で被覆している。また，底面は若干凹んでおり円形状を呈する。カマドの内面及び底面は強い火を受けたため著しく赤変しており，焚口部には炭を包含した暗褐色土などが流入していた。一方，煙道部はトンネル状になっており，この部分も赤変が著しい。

遺物は弥生土器，土師器，須恵器などの土器類，楔状石器が出土したが，一部の土師器・須恵器は床面から出土しており，これらの遺物からみて本住居跡の時期は6世紀後半頃と考えられる。

出土遺物　（第9図，図版10）

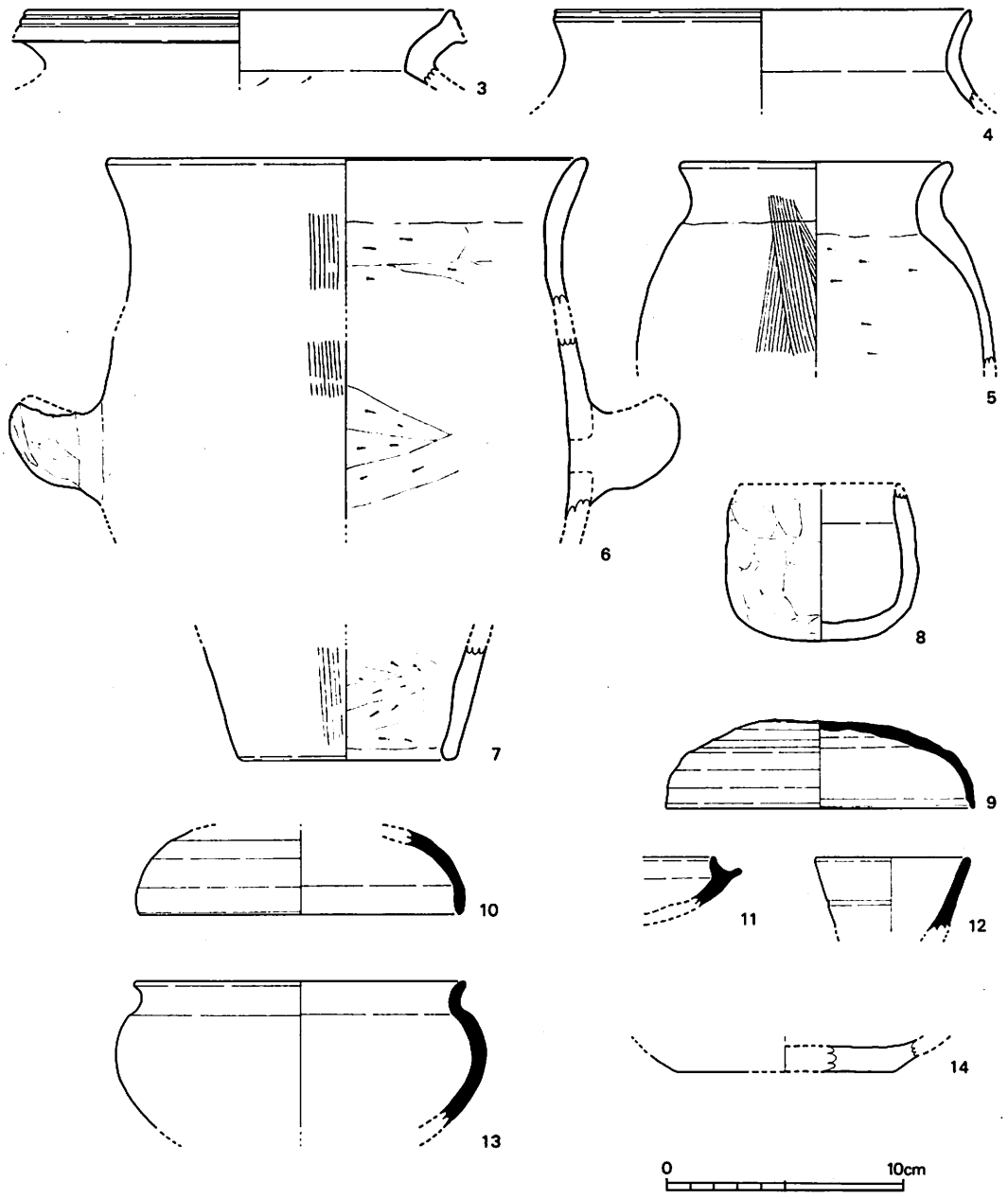
弥生土器　3は甕形土器で，口縁部は頸部から断面「く」字状に外反して短くのび，端部は上下方に若干拡張して内傾している。端部外面には浅い3条の凹線を廻している。調整は口縁部内外面を横ナデし，頸部内面はヘラ削りである。

土師器　4・5は甕形土器で，頸部から緩やかに外反して短くのび，端部は丸くおさめている。4の端部外面には浅い1条の凹線が廻る。調整は口縁部内外面とも横ナデしている。5の体部は頸部から緩やかにカーブして下方へ続く。体部外面は縦位の刷毛目調整，内面は横位のヘラ削りである。6・7は甑形土器で同一個体と思われる。口縁部は頸部から緩やかに外反してやや肥厚してのび，端部は丸くおさめている。体部は緩やかにカーブして下方に続き，中位に牛角状の把手が付いている。7は底面付近で端部は丸くおさめている。調整は口縁部内外面横ナデし，体部から底面にかけては外面縦位の刷毛目調整，内面は横位又は斜位のヘラ削りである。

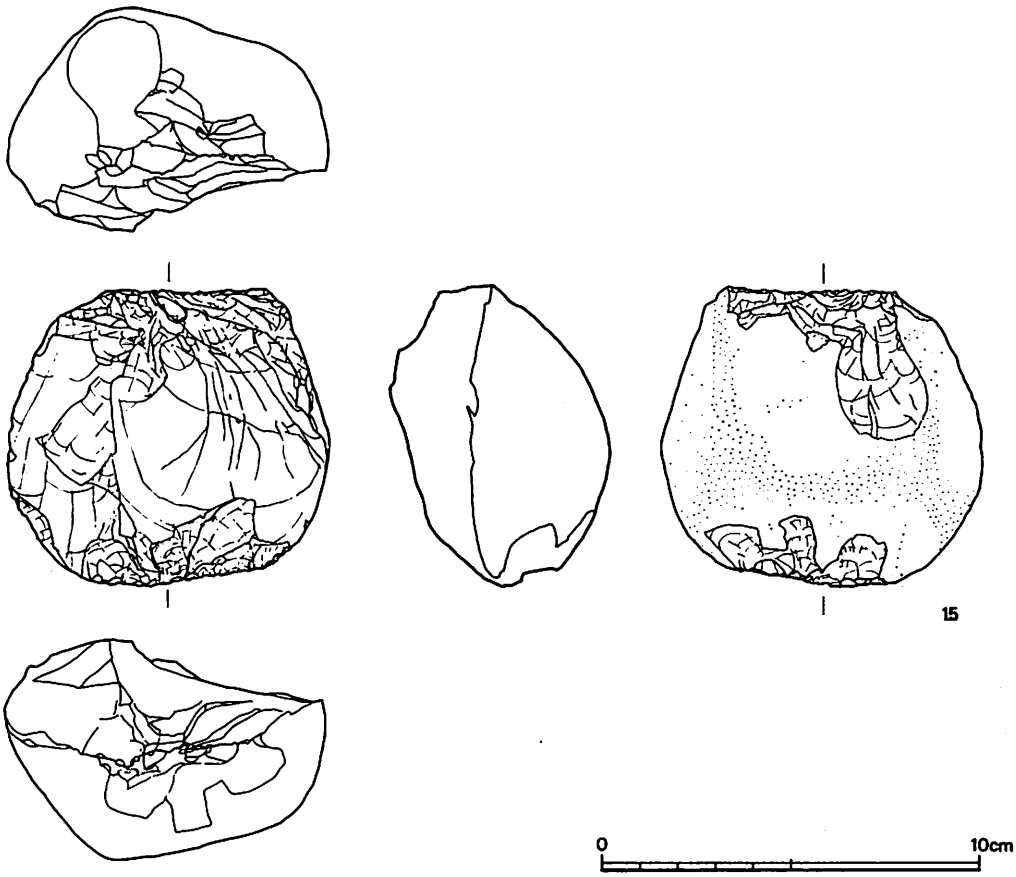
8は椀形土器で，口端部はわずかに欠損している。底部は丸底で，体部は底部から強く

内湾して立上る。調整は外面が指頭による押圧で，内面はナデによって仕上げている。

須恵器　9・10は杯蓋でともに天井部は丸みをもち，9の体部はやや外方に開き，端部内面には浅い1条の沈線が廻っている。10の体部は垂下し端部はやや尖り気味となっている。調整は9・10とも天井部をヘラ削りし，体部及び端部内外面にかけてはロクロナデで



第9図　SB02出土土器実測図（1:3）



第10図　SB02出土石器実測図（1:2）

ある。11は杯身で受部はやや外上方にのび，立上りはやや内傾し端部は丸くおさめている。調整は内外面ともロクロナデである。12は壺の口縁部で，外面中位に1条の沈線を廻している。調整は内外面ともロクロナデである。13は坩で，口縁部は頸部から緩やかに外反してのび，端部は丸くおさめている。体部は丸みをもち，最大径は中位よりやや上方にある。

土師質土器　14は杯の平底の底部であり，底部切離しは回転糸切りによる。

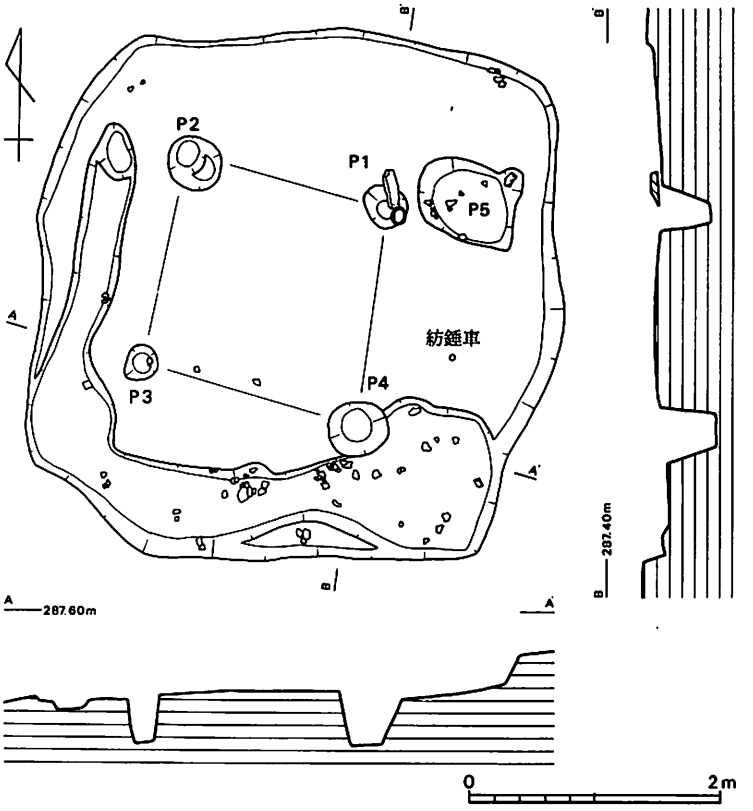
石器　（第10図，図版10）

15は円礫に若干の加工を行った楔状石器である。礫の片面に主に上方向から粗い剝離を施すことにより半裁している。一見すると石核とも思われるが，さらに上下両端とも左右両側から細かな加工を加えることによって，刃部を形成する。なお，この細かな剝離の一部には使用による剝離もあるが，両者は区別できない。長さ7.7cm，幅8.5cm，厚さ5.8cm，重さ378gである。

ＳＢ03

（第11図，図版5）

ＳＢ02に近接して検出した平面形が隅丸方形の住居跡で，規模は各辺3.30～3.75ｍである。壁の残存状況は不良で，最も残りの良好な東壁の高さは最大20cmである。床面は地山に達し，ほぼ平坦でやや南西側に傾斜している。主柱穴は4本で，径24～44cm，深さ36～46cm，底面レベルはほぼ一致する。柱穴間の距離は1.64～1.80ｍでほぼ等距離である。また，床面南壁側から西壁にかけてＬ字状に深さ6～9cmの溝状遺構を検出したほか，住居跡北東隅で不整円形の土壙を検出した。溝状遺構は住居跡南東隅で幅約1.2ｍ，西側にかけて幅を次第に減じ北西隅で終る。壁際では一部2段掘りとなり，断面は浅い逆台形である。土壙は長径約80cm，短径約60cm，深さ約10cmである。溝状遺構及び土壙の覆土はともに住居跡覆土と同質であることから住居跡に伴うと考えられる。

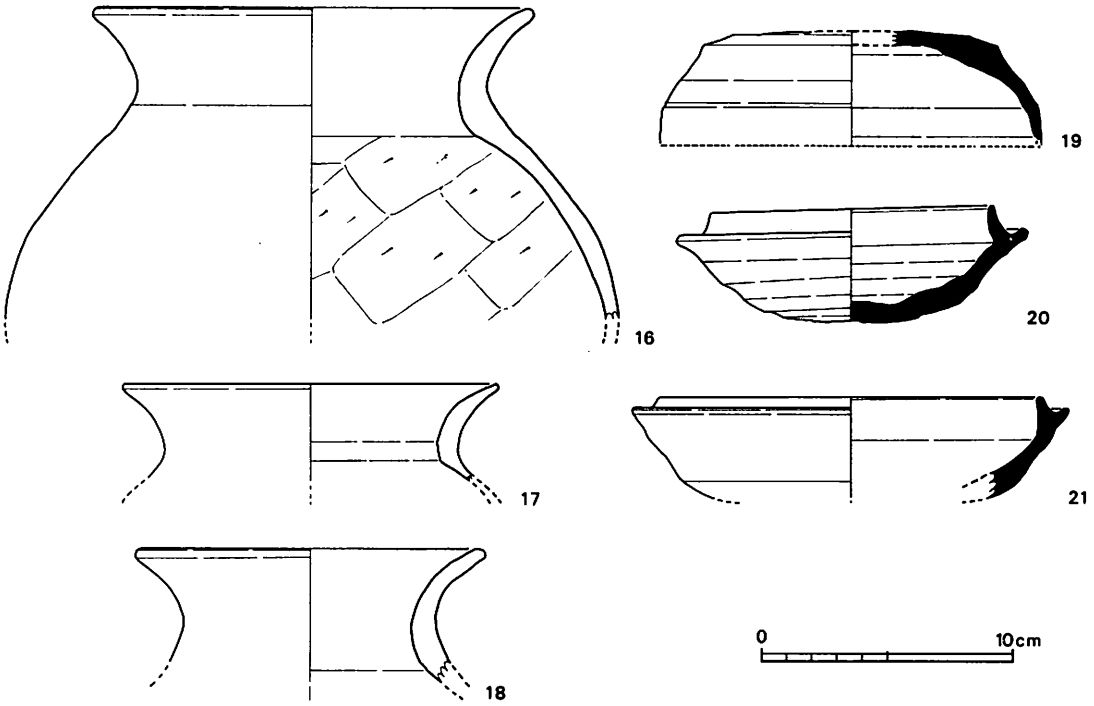


第11図　ＳＢ03実測図（1:60）

遺物は溝状遺構及びＰ5の覆土中に細片化した土師器などが比較的集中して出土したほか，少量ではあるが鉄滓が出土した。また，Ｐ1検出面直上から偏平な縦長の石とともに須恵器杯身の完形品1，東壁寄りで土製紡錘車1，Ｐ5覆土中から鉄製品1が出土した。本住居跡はこれらの遺物からみて6世紀後半頃と考えられる。

出土遺物　（第12・13図，図版11）

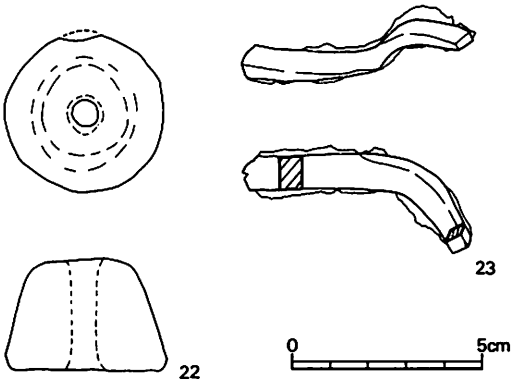
土師器　16～18は甕形土器の口頸部で，口縁部は頸部から緩やかに外反し短く続き，端部は丸くおさめている。16の体部は頸部から丸くカーブして下方に続く。調整は口縁部内



第12図　SB03出土土器実測図（1:3）

外面とも横ナデしている。なお16の体部外面はナデかとみられるが摩滅が著しい。内面はヘラ削りである。

須恵器　19は杯蓋で，天井部は平坦で体部との境に稜がある。体部は外開きした後，口縁部にかけ垂下している。調整は口縁部及び体部内外面はロクロナデ，天井部外面はヘラ削り，内面は不定方向にナデ，20・21は杯身で，底部から体部にかけては丸みをもち，受部は外上方に短く続く。立上りは内傾し，口縁部は丸くおさめている。調整は内面ロクロナデ，外面は口縁部から体部がロクロナデ，底部はヘラ削りである。



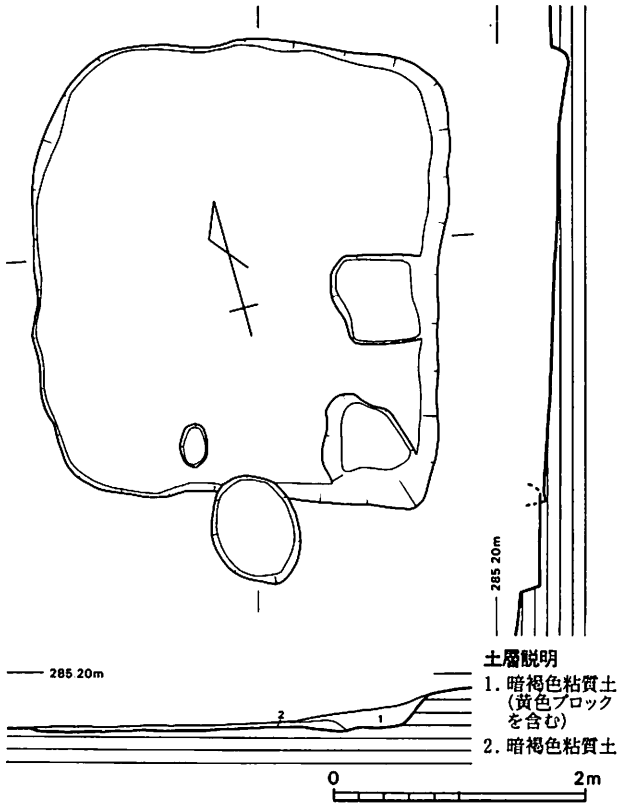
第13図　SB03出土土製紡錘車・鉄器実測図（1:2）

土製紡錘車　22は上面径2.7cm，底面径3.9cm，高さ2.9cmで，断面は台形である。上面中心には径1cmの軸棒孔が穿たれている。色調は暗褐色を呈し，焼成は良好である。

鉄器　23は鎹（かすがい）と考えられ，片側の端部が欠損している。残存長は6cmで，断面は方形を呈しているが端部付近では菱形をなしている。

ＳＢ04　（第14図）

ＳＢ02の北西約５ｍに位置し，平面形が隅丸方形の住居跡状遺構である。規模は東壁辺で3.42ｍ，南壁辺で2.70ｍ，西壁辺で3.24ｍ，北壁辺で2.80ｍである。壁の残存状況は不良で，最も良好に残る東壁の高さは約20㎝である。床面はほぼ平坦でやや北西隅にかけ傾斜している。主柱穴は精査したが確認できなかった。ただし南壁寄りの中央よりやや西側に寄った位置で長径34㎝，短径22㎝，深さ約15㎝の平面形が楕円形のピットを確認した。また南東隅及び東壁中央の２か所で不整形の浅い落込みを確認したが，性格については不明である。



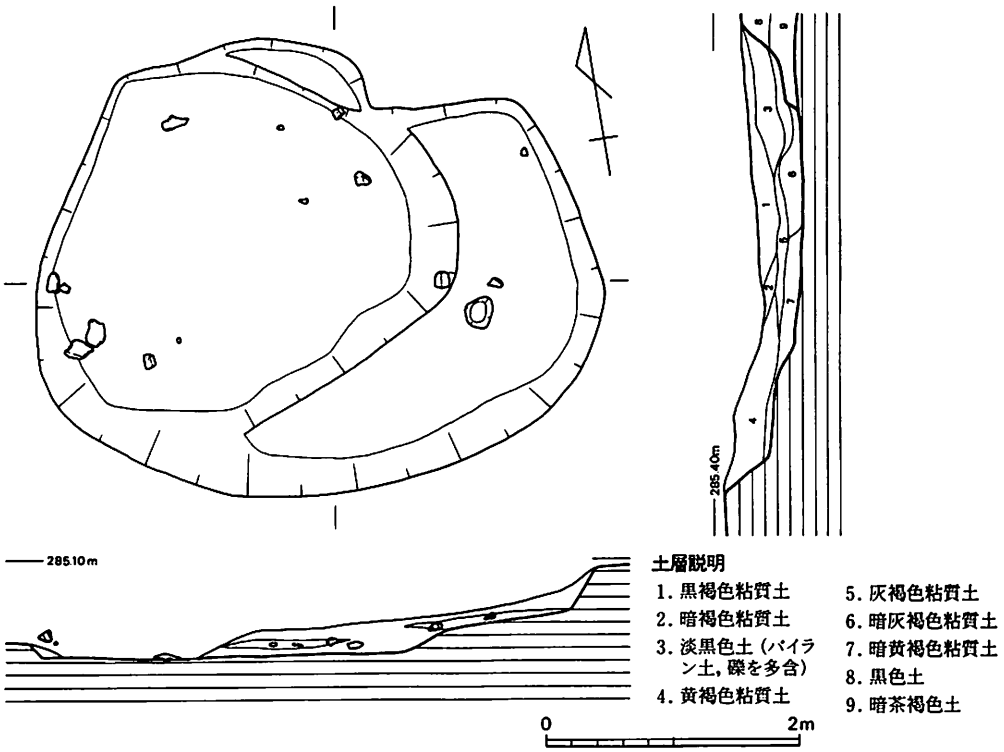
第14図　ＳＢ04実測図（1:60）

遺物は土師器細片３，須恵器片１，土師質土器片１があるのみで，本住居跡状遺構の時期を特定できるほどのものではなかった。

ＳＢ05　（第15図，図版9a）

調査区北辺部から検出した平面形が不整円形の住居跡状遺構である。本遺構は，ＳＢ02と同様に谷部に当る場所に掘り込まれ，掘り込み面が土層観察から黒フク土中であることを確認した。本遺構は二段掘りされ，東側にテラス面を有する。このテラス面は東西1.2ｍ，南北3.2ｍで，深さは東壁で約30㎝あり，床面はやや西側に傾斜する。一方，西側の一段低い床面は東西約3.25ｍ，南北約3.55ｍである。東側テラス面とのレベル差は約25㎝で，床面はほぼ平坦である。柱穴は東側テラス面中央で径約20㎝，深さ約10㎝のものを１個確認したが，他には確認できなかった。

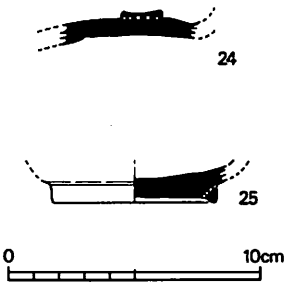
出土遺物は少量の須恵器，土師質土器のほか，不明鉄器１点，著しく火を受けた台石状の偏平な石などがある。



第15図　ＳＢ05実測図（1:60）

出土遺物　（第16図，図版11）

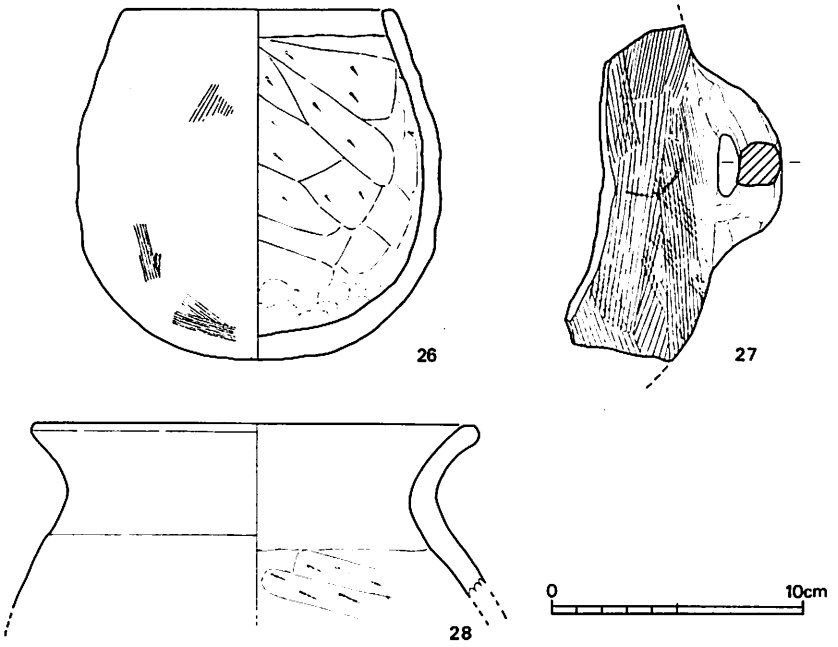
須恵器　24は平瓶の体部の上部で，体部の円盤状封鎖痕が残っている。外面にはボタン状の貼付けがある。調整は内外面ともロクロナデしている。25は杯の底部で，断面三角形の貼付け高台がある。底部は平坦で体部にかけて緩やかにカーブしている。調整は底部内面及び外面高台付近ロクロナデし，底部外面は回転糸切り後ナデと思われる。



第16図　ＳＢ05出土土器実測図（1:3）

ＳＢ06　（第21図，図版6）

ＳＢ08と重複した状況で検出した竪穴住居跡である。検出面の削平が著しいため，東壁が残るのみで残存長は約2.5ｍである。本来はこれより若干大きな規模で，平面形が方形又は隅丸方形を呈したと思われる。残存壁高は約24㎝で，床面はやや西に傾斜する。主柱穴は4本（Ｐ14～17）確認した。規模は径16～32㎝，深さ26～48㎝で，各柱穴間の距離は1.40～1.52ｍでほぼ等距離にある。また，東壁際の中央で50×40㎝の範囲に焼土を確認した。遺物は東壁際から土師器の甕形土器，甑形土器，鉢形土器が出土した。



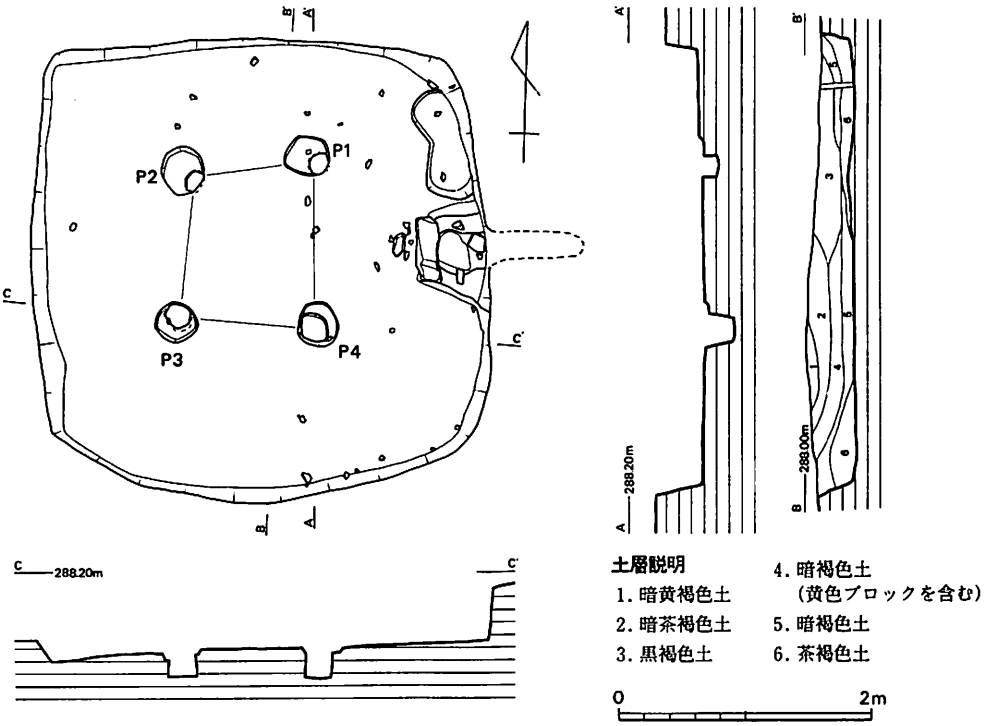
第17図　ＳＢ06出土土器実測図（1：3）

出土遺物　（第17図，図版11・12）

土師器　26は鉢形土器で，底部は緩やかな丸底で体部にかけて緩やかにカーブしている。最大径は中位に有り，口縁部にかけやや肥厚してほぼ直線的に内傾して上方にのび，端部はわずかに平坦面を造出している。外面の器壁剝落が著しいが，調整は口縁部内外面横ナデ，外面は体部から底部にかけ斜位の刷毛目調整で，内面は体部が斜位にヘラ削りし，底部は指頭による押圧である。27は甑形土器の体部で，外面には粘土紐を貼付けた環状の把手がある。調整は外面やや粗い縦位を主とした刷毛目調整で，内面は横位のヘラ削りである。28は甕形土器の口頸部で，口縁部は頸部から緩やかに外反し，端部は丸くおさめている。調整は外面及び口縁部内面は器面剝落のため不明で，頸部下半は横位のヘラ削りである。

ＳＢ07　（第18・19図，図版7）

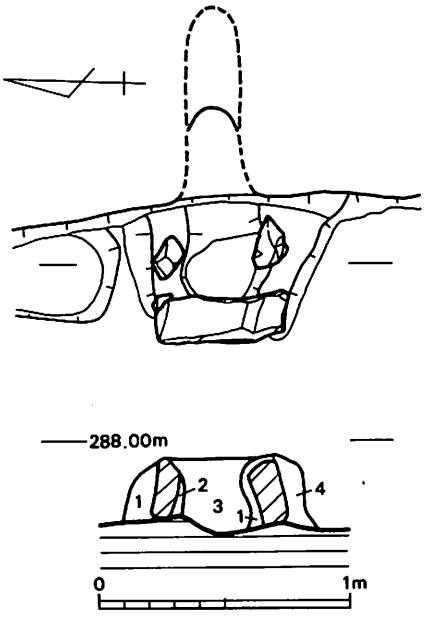
ＳＢ02の南東約3ｍの平面形が隅丸方形の住居跡で，規模は約3.2ｍ×3.1ｍで，平面形はほぼ正方形である。壁は各辺とも比較的良好な状況で遺存しており残存壁高は26～42cmで，床面からほぼ垂直に立上がる。床面はほぼ平坦で，主柱穴4本を検出した。柱穴の規模は径30～36cm，深さ16～24cmで，各柱穴間の距離は1.0～1.35ｍである。また住居跡北東隅で長さ90cm，幅28～36cm，深さ1～2cmの浅い不整形な落込みを検出した。一方，



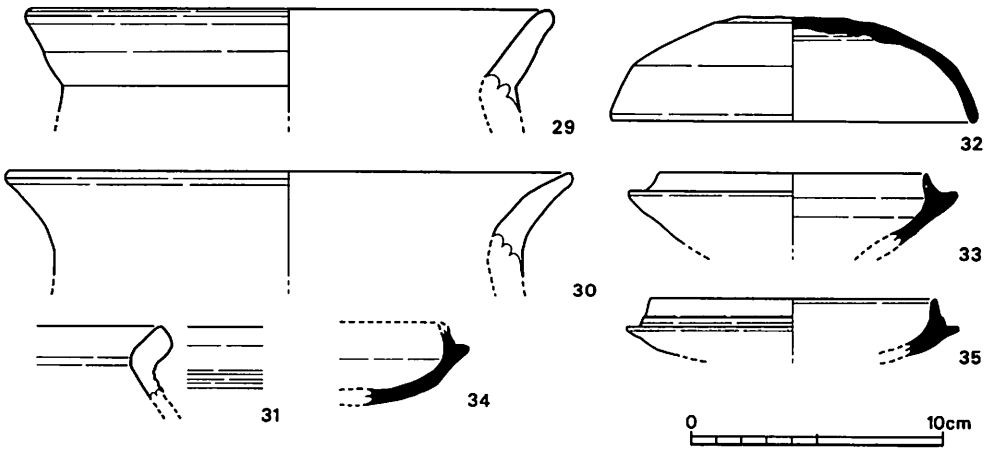
第18図　SB07実測図（1:60）

東壁中央で造付けのカマドを検出した。煙道部は攪乱を受けていたため全体の規模は明らかではないが，焚口部での規模は長さ58 cm，幅86 cmである。焚口部の構造は床面に直接角礫を縦長に，南北両側に各2石を立て燃焼部側の石材に接して横長の角礫を架構し，他の部分は地山土を含んだ土で被覆しており，SB02のものと若干構造上の違いがある。また底面はわずかに凹んでおり，炭を含んだ黒褐色土が充満していた。

遺物は，カマド焚口部上面に須恵器甕の体部が貼付いて出土したほか，床面から須恵器蓋杯，土師器甕形土器などの破片が少量散在して出土した。これらの遺物から本住居跡の時期は6世紀後半頃と思われる。



第19図　SB07カマド実測図（1:30）



第20図　SB07出土土器実測図（1:3）

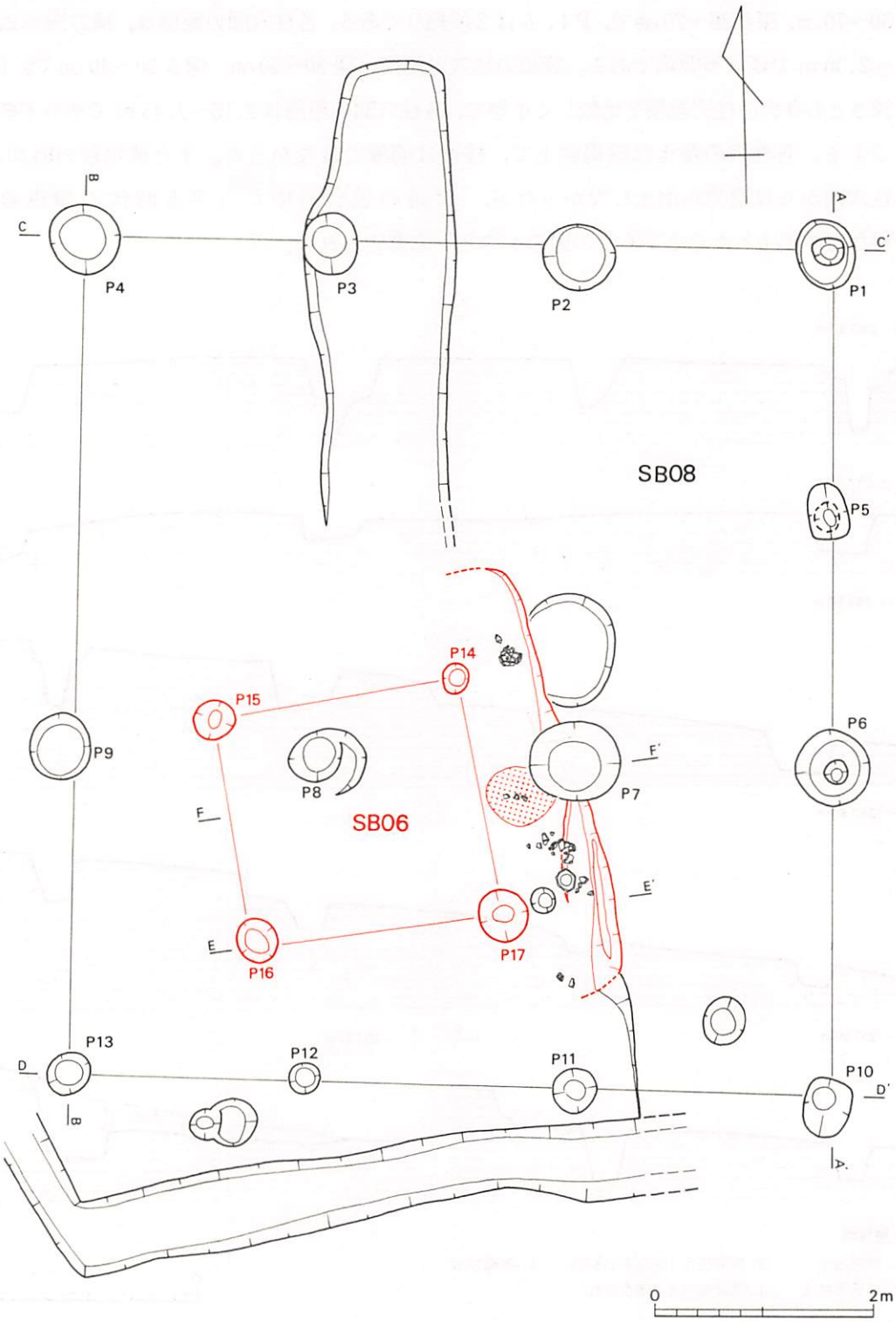
出土遺物　（第20図，図版11・12）

土師器　29・30は甕形土器の口頸部で，29は頸部から断面「く」字状に屈曲して外上方にのび，端部は丸くおさめている。調整は内外面とも横ナデしている。30は頸部から緩やかに外反し，端部はやや尖り気味に丸くおさめている。調整は内外面とも横ナデしている。31は頸部から断面「く」字状に外反して短くのび，端部は矩形を呈している。頸部外面には浅い凹線が3条廻っている。調整は内外面とも横ナデしている。

須恵器　32は杯蓋で，天井部は丸みをもち体部にかけて緩やかにカーブしている。体部は直線的に外下方に開き端部は丸くおさめている。調整は焼成不十分であるうえ，器面が剝落しているため不明である。33〜35は杯身で，33は受部がわずかに外上方に短くのびる。立上りは内傾気味に立上り，端部は尖る。調整は内外面ともロクロナデしている。なお，受部端部に自然釉が付着している。34は底部から体部にかけ緩やかにカーブし，受部は短く外方にのびる。立上りはやや内傾している。調整は内面及び外面体部にかけロクロナデし，底部にかけてはヘラ削りである。35の受部は外方に短くのび，立上りはやや内傾し，端部は丸くおさめている。調整は内外面ともロクロナデしている。なお受部から体部にかけての外面に自然釉が付着している。

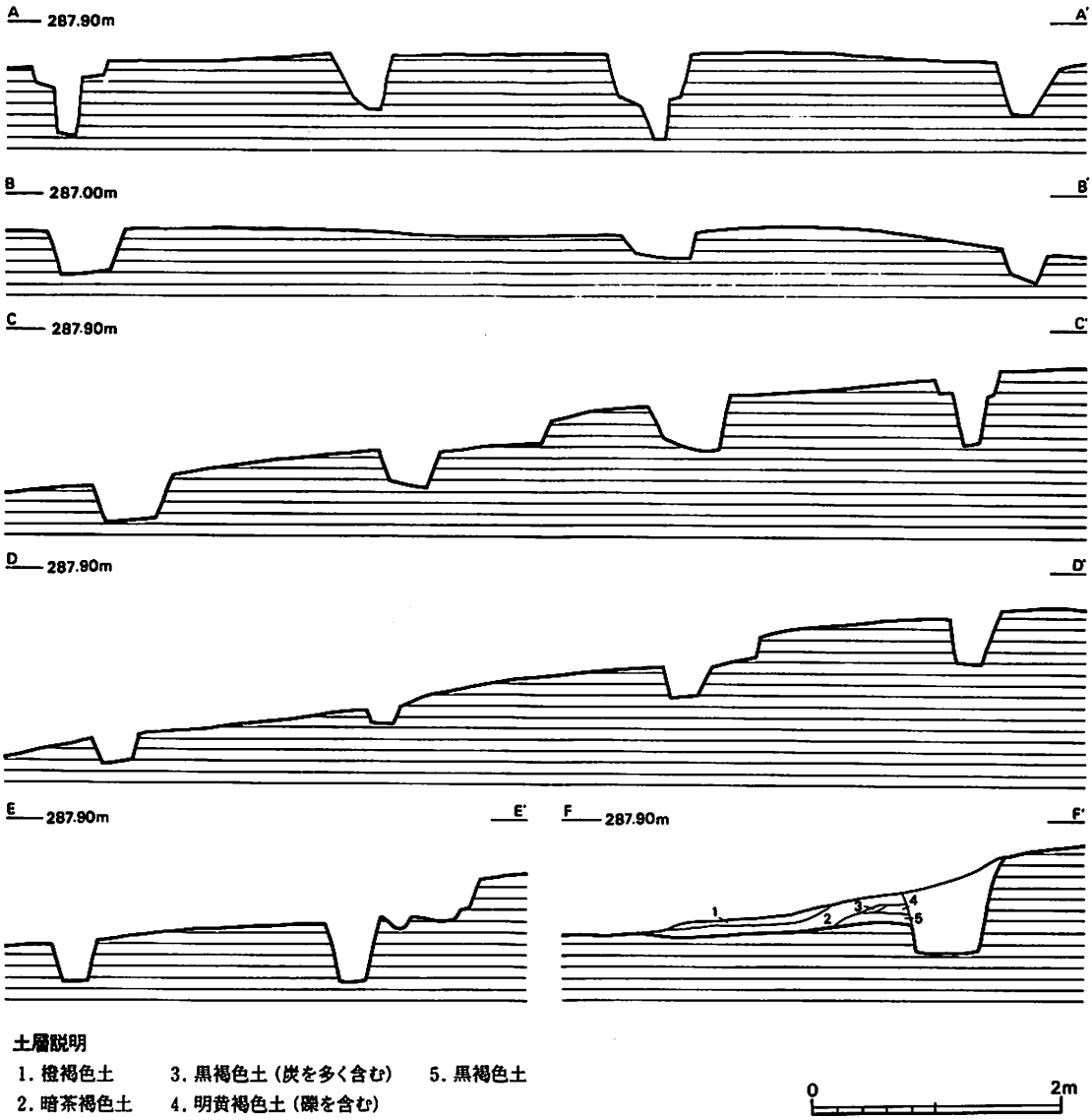
SB08　（第21・22図，図版8a）

SB06と重複して検出した3間×3間の大規模な建物跡で，南側1間分については柱穴規模や配列状態などから庇になると考えられる。身舎規模は桁行6.8 m，梁行4.7 m，庇部の桁行2.9 m，棟方向はほぼ東西方向である。身舎の柱穴（P 1〜4，6〜9）規模は径

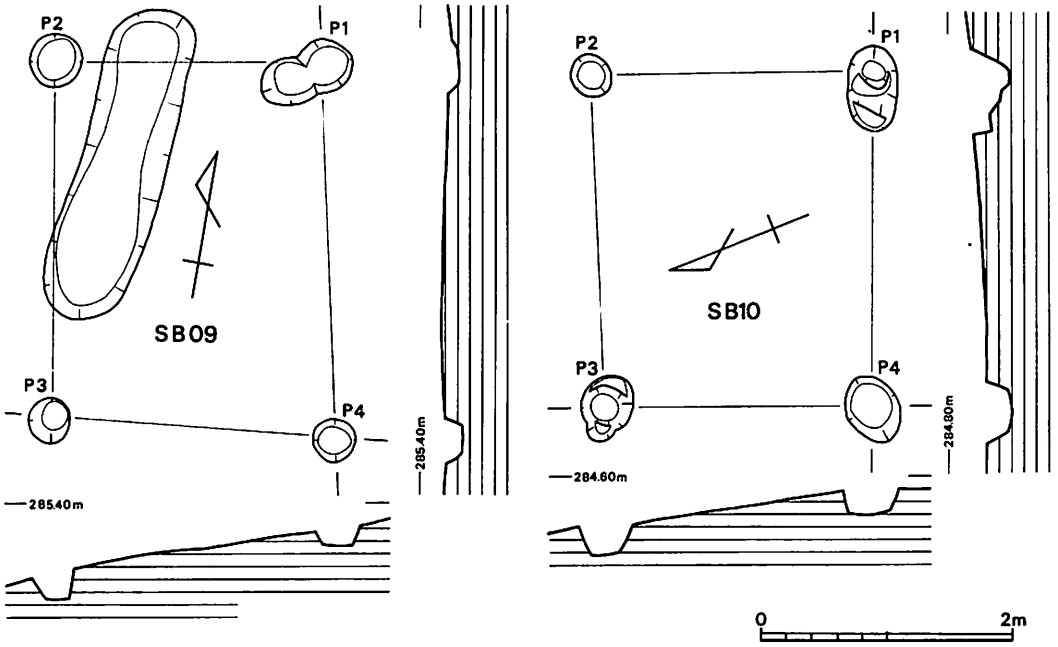


第21図　SB06・08実測図（1:60）

50～70㎝，深さ30～70㎝で，P1，6は2段掘りである。各柱穴間の距離は，棟方向が2.25～2.30ｍでほぼ等間隔である。庇部の柱穴の規模は径30～50㎝，深さ20～40㎝で，径，深さとも身舎の柱穴規模と比較して小型で，各柱穴間の距離は2.15～2.45ｍでやや不統一である。各柱穴の覆土は暗褐色土で，柱痕は明確ではなかった。また建物跡の時期は，柱穴内からは遺物が出土しなかったが，付近の包含層中から平安時代の須恵器の杯などが出土したことからこの頃のものと一応考えられる。



第22図　SB06・08断面図（1:60）



第23図　SB09・10実測図（1:60）

SB09　（第23図，図版8b）

1間×1間の小規模な掘立柱建物跡で，規模は桁行2.8～3.0m，梁行2.1～2.25mのやや不整長方形である。柱穴の規模は径32～42cm，深さ9～18cmで，覆土は暗褐色土である。時期については遺物がないため不明である。

SB10　（第23図，図版8c）

1間×1間の掘立柱建物跡で，規模は桁行2.7m，梁行約2.2mで，柱穴の規模は径35～55cm，深さ20～40cmで，覆土は暗褐色土である。時期については遺物がないため不明であり，性格についてもSB09同様に小規模であることから特定しがたい。

(b)　土壙

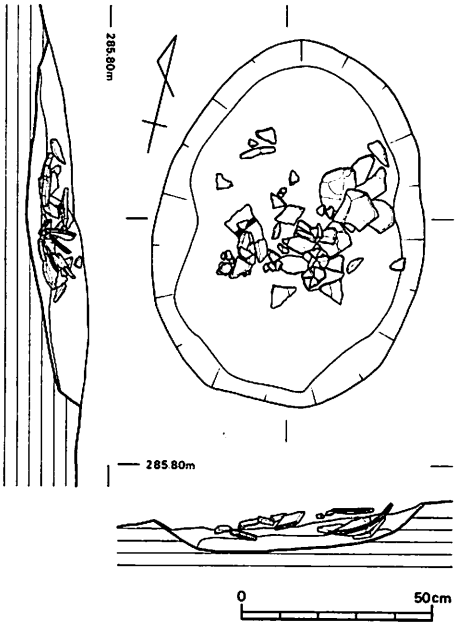
調査区域内からは計6基の土壙を検出したが，大半が著しく削平を受けているうえ，遺物が乏しく，わずかにSK04から弥生土器片が出土したにすぎない。また性格についてはSK04が土壙墓の可能性が考えられる。他のものについては明らかでない。

ＳＫ04　（第24図，図版9b）

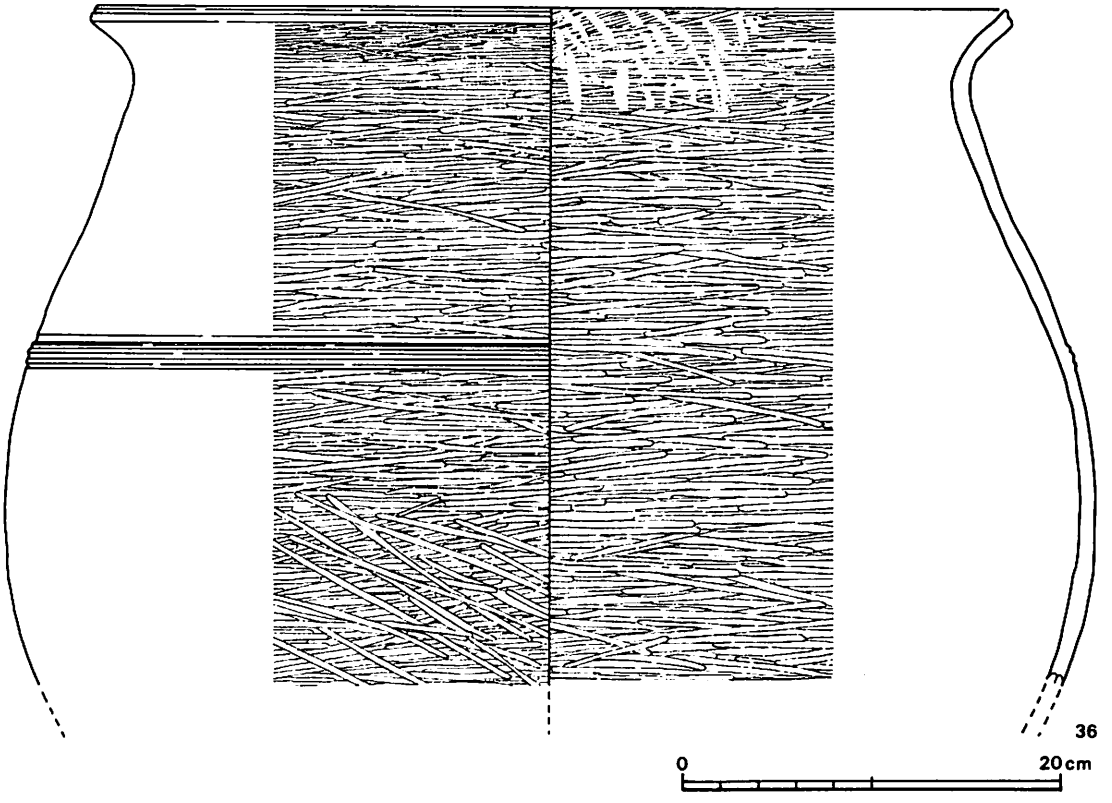
平面形が楕円形土壙で，規模は長径95㎝，短径70㎝，深さ13㎝で，断面は浅いＵ字形である。覆土は黒褐色土で，遺物は弥生時代前期末の大型の壺形土器片が土壙の底面直上から出土した。

出土遺物　（第25図，図版12）

弥生土器　36　大型の壺形土器片で，口縁部は頸部から緩やかに外反し，端部は矩形を呈する。体部は頸部から緩やかにカーブして下方へ続き，最大径は体部中位ほどにあると思われる。口縁端部に１条，肩部に４条の浅い沈線を廻ら



第24図　ＳＫ04実測図（1:20）



第25図　ＳＫ04出土土器実測図（1:4）

している。調整は，内外面とも丁寧な横位のヘラ磨きを施している。色調は淡橙色を呈し，焼成は良好である。

(c) **その他**

ＳＸ01～04

調査区内の4か所で倒木による痕跡を検出した。規模はともに径が2ｍ前後，深さは約1.5ｍ前後で，断面は逆台形である。平面形は楕円で，覆土は中央部が黄褐色土，周辺部が黒褐色土で，倒木による痕跡特有の層序の逆転が認められた。

(d) **遺構に伴わない遺物**　(第26・27図，図版12・13)

調査区からは弥生土器（37～49），土師器（50～53），須恵器（54～64），土師質土器（65～67），瓦器（68），緑釉陶器・灰釉陶器などの土器類が出土した。

弥生土器　37～42は前期末の壺形土器で，37・39は口縁部が頸部から緩やかに外上方にのび，38は短くのびて端部がやや肥厚している。37・40は頸部外面に貼付け凸帯がある。調整は37・40は内外面ともていねいにヘラ磨きし，37は淡橙色，38～40はやや白っぽい暗褐色を呈する。焼成はいずれも良好である。41・42は平底の底部で，体部にかけて直線的に外上方にのびている。調整は41が外面ヘラ磨きし，42が外面指頭による押圧で，内面がていねいな横位のヘラ磨きを施している。43は前期末の甕形土器の口頸部で，口縁部は頸部から緩やかに外反して短くのび，端部はやや肥厚している。端部外面にはヘラ状工具による刺突，肩部に3条の沈線を廻らしている。調整は口縁部内外面横ナデし，体部外面は単位の細かい縦位の刷毛目を残している。44～49は中期後半の甕形土器で，44は口縁部が頸部から強く屈曲し，やや肥厚してのび，端部は上下方に拡張している。また45～48の口縁部は頸部から緩やかに外反し，やや肥厚してのび，端部は上下方に拡張している。端部外面には数条の凹線が廻り，48は頸部外面にヘラ状工具による刺突文が廻る。調整はいずれも口縁部内外面横ナデし，体部内面はヘラ削りしている。49は小型品で，肩部及び最大径付近に3条の凹線を廻らし，この間に櫛歯状工具による刺突文を廻らしている。調整は外面が2次焼成を受けており不明で，内面はヘラ削りである。

土師器　50・51は甕形土器で，50の口縁部は頸部から緩やかに外反し，端部は丸くおさめる。調整は口縁部内外面横ナデし，体部内面横位のヘラ削りである。51の口縁部は頸部から緩やかに外反して短くのび，端部はやや尖り気味となっている。調整は内外面とも器壁剝落が著しいが，わずかに外面に叩き目を残している。52の鉢形土器の口縁部は体

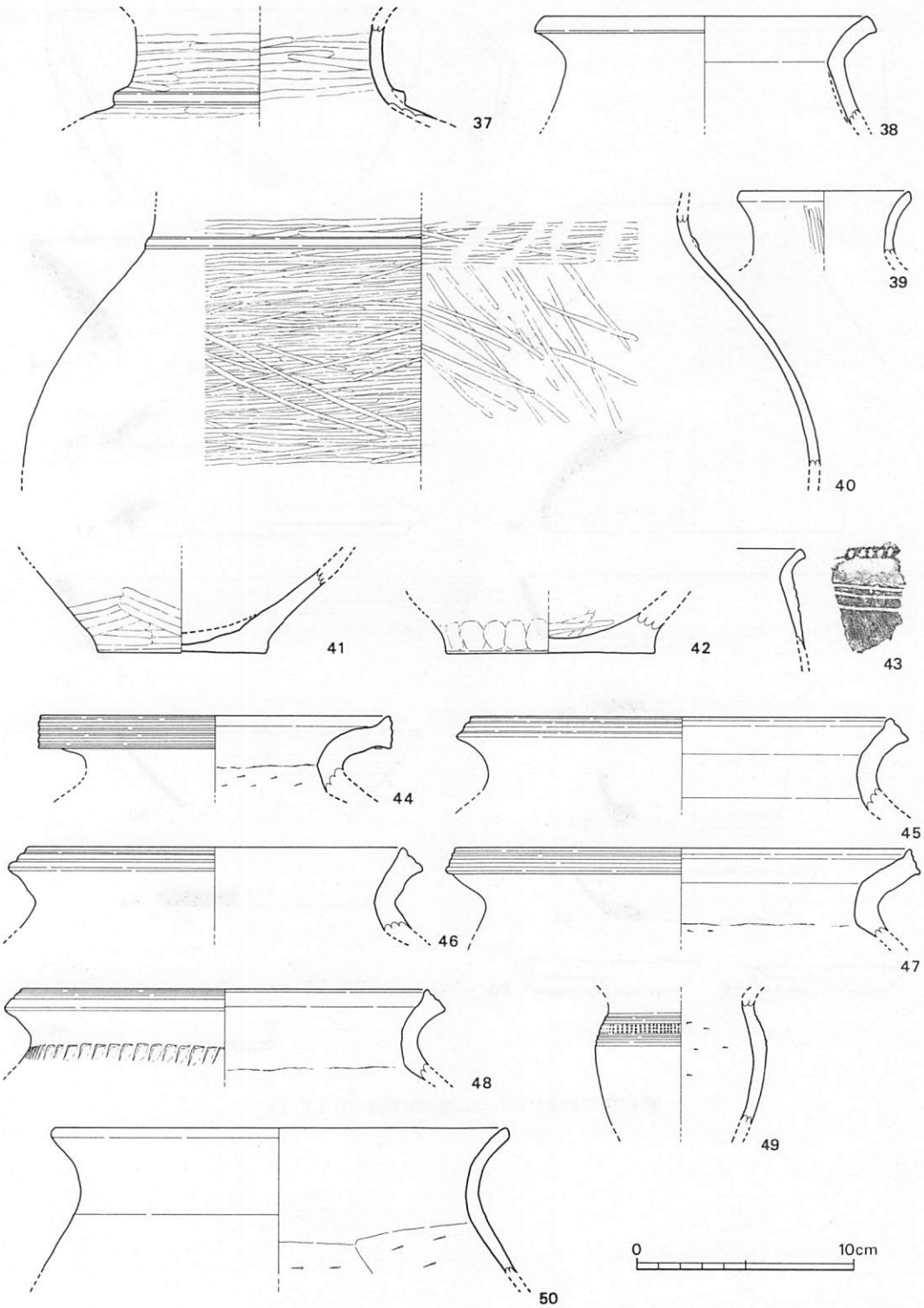
部からやや内湾気味に立上り，端部は丸くおさめている。調整は内外面とも器壁剝落が著しく詳細は不明であるが，体部内面に指頭圧痕をわずかに残している。53は甕の口頸部で，口縁部は頸部からほぼ直立気味に立上り，端部は丸くおさめている。調整は口縁部内外面横ナデし，頸部外面はやや粗い縦位の刷毛，内面は横位のヘラ削りである。

須恵器　54は甕の口縁部で，緩やかに外反し端部は上下方及び内側に拡張し，上面平坦となる。調整は内外面ロクロナデし，外面には自然釉が付着している。55～57は杯蓋で，55は天井部から体部にかけ丸みをもち，口縁部は垂下して端部を丸くおさめ，内面がやや凹んでいる。調整は天井部外面が回転ヘラ削りし，体部及び口縁部内外面はロクロナデしている。56の体部はほぼ直線的に外下方に開き，口縁部は体部から屈曲して外方に短くのび，端部は垂下している。調整は内外面ともロクロナデし，外面には自然釉が付着している。57の体部はやや内湾気味に外下方に開き，口縁部は垂下した返りをもち，端部はやや尖り気味になっている。調整は内外面ともロクロナデしている。

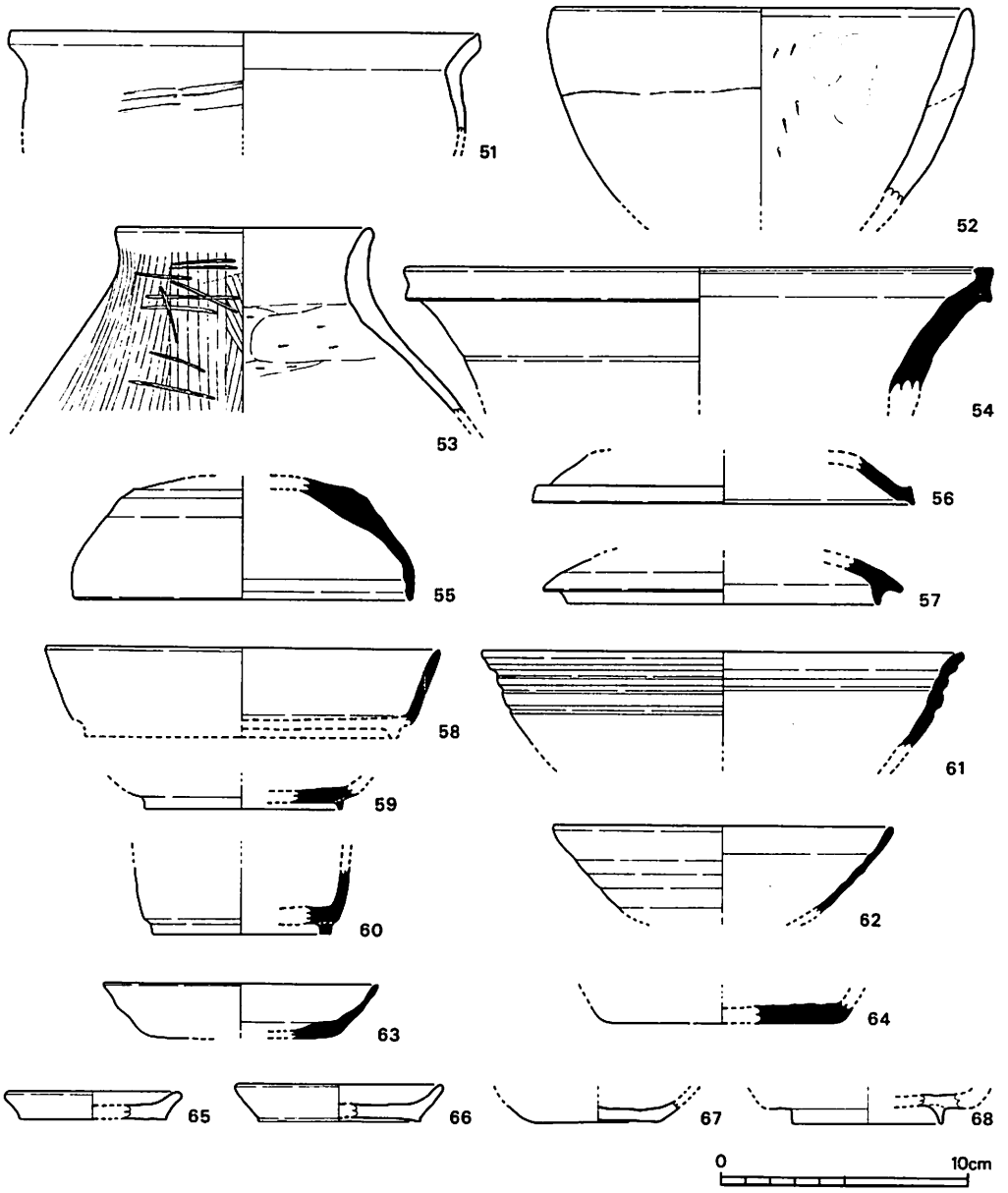
58～60は高台付きの杯で，58は底部が59・60に比較して大きくなる。底部はほぼ平坦となると考えられ，底部から体部にかけては強く屈曲して体部は外上方にのびる。高台は断面逆台形となり，ほぼ垂直に貼付けている。調整はいずれも内外面ともロクロナデしている。61・62は椀で，口縁部は体部から内湾気味に立上り，口端部は61がやや短く外反し丸くおさめ，62は単に丸くおさめている。61は口端部直下の体部に3条の凹線を廻らしている。調整はともに内外面ともロクロナデしている。63・64は杯で，底部はともにほぼ平底である。63の体部は底部から屈曲して外上方に開き，口縁部はやや肥厚して端部は丸くおさめている。調整はともに口縁部，体部内外面及び底部内面ロクロナデ，底部外面は回転ヘラ切り後ナデている。

土師質土器　65は平底で，体部は底部から短く外反気味にのび，端部は丸くおさめている。66はやや凹み底で，体部は底部からほぼ直線的に外上方に短くのび，端部は丸くおさめている。また67の底部はやや凹み底で，体部はやや内湾気味に立上る。調整は65～67すべて内面及び体部外面横ナデし，底部は回転糸切りしている。

瓦器　68は平底を呈し，断面三角形の貼付け高台を有し，高台の高さは0.7cmである。調整は内外面とも横ナデしている。



第26図　遺構に伴わない遺物実測図・拓影（I）（1:3）



第27図　遺構に伴わない遺物実測図(II)（1:3）

Ⅳ　ま　と　め

本遺跡では今回の調査によって，弥生時代前期，古墳時代後期の住居跡及び平安時代の建物跡などを確認した。これらの時期の遺構は町内において調査例が少なく，当地域の原始，古代の歴史を解明するうえで新たな資料を加えることができたが，調査対象地が限定されていたため遺跡の全容を明らかにしたとは言い難い。したがって，ここでは本遺跡の立地条件，各時代の遺構のあり方などについて若干を述べてまとめとしたい。

立地について

本遺跡は，江の川支流，冠川の氾濫原を望む西向きの低位段丘緩斜面上の，傾斜変換線付近に立地する。調査の結果，3本の浅い小谷が調査区内に湾入していたことが明らかとなったが，谷部には厚く黒フク土が堆積し，この層を掘り込んで6世紀後半の住居が造られており，少なくともこの時期には現状とさほど大差ない地形であったと想定できる。

一方，町内における墳墓を除く集落跡，包含地などの分布状況は，沖積地又は狭小な谷底平野を望む比較的比高の低い場所に立地しており，本遺跡も同様な傾向の立地条件で成立した集落と考えることができよう。

弥生時代の遺構・遺物について

弥生時代前期の遺構にはＳＢ01，ＳＫ04があり，両遺構は近接して存在しており，相互に関連した遺構と考えられる。このうちＳＢ01は少量ながら弥生土器が出土したことや，平面形は円形で，主柱穴は5本，中央には不整形の炉跡状のピットを有するなど，他の時期のものと異なることから当該時期のものと一応考えられよう。

ところで県内における前期の住居跡としては大朝町新庄所在の横路(よころ)遺跡[1]，三次市南畑敷町所在の高蜂(たかはち)遺跡[2]がある。前者は低位の段丘上に形成された集落跡で，一軒の住居跡と多数の土壙で構成されている。このうち住居跡は，本遺跡検出のものよりやや大型で6本柱と想定されている。また後者は，丘陵尾根付近に単独で営まれた住居跡で，規模は径約3.5ｍと小型で，しかも主柱穴は明確ではなく，幾つかの支柱を組合わせて構築したと想定されている。ところで県内では5本柱の住居例は確認されていないが，他県例では福岡県筑紫野市所在の野黒坂遺跡16号住居跡[3]や，同県小郡市所在の三沢落ヶ浦(ふつがうら)遺跡Ｂ地区4号住居跡[4]などがある。

ＳＫ04は，現状では削平が著しく，浅い小型の土壙であるが，土壙底面から大型の壺形土器が出土しており，土器棺墓の可能性が考えられる。本遺跡周辺では丁保余原（ようろほよばら）の塚迫遺跡[5]で土壙墓，土器棺墓で構成される集団墓が確認されているが，本遺跡では単独で営まれており，この違いが各集団のあり方に起因するものであるのか，両遺跡が比較的近距離にあることなどを考え合わせて今後の課題として残されよう。

上述のように弥生時代前期の遺構については，県内では類例に乏しく不明な点が多い。とくに県内では初見と考えられる５本柱の住居跡の存在など今後の資料の増加を待って検討すべき内容を含んでいる。なお本地域周辺で当該時期の遺物包蔵地が確認されている。これらの遺跡の大半が狭小な谷水田又は小規模な氾濫原を生産基盤とする場所を望む立地にあることから，農耕集落が比較的早い段階で山間地域に進出したことを示すとともに，これらの農耕集落は小規模な単位集団であったことを窺わせる。

出土土器については，調査区内から出土したものを含め壺形土器・甕形土器とも貼付け凸帯手法や，沈線の多条化など横路遺跡出土のものと比較してやや後出的であり，塚迫遺跡出土のものと大差ない前期末葉の様相を示すものと促えられよう。なお，土器の胎土及び色調の特徴からみると，塚迫遺跡出土のものよりも横路遺跡出土の土器に近似している。

古墳時代の遺構について

当該時期の遺構にはＳＢ02，03，06，07の４軒の住居跡がある。これらの住居跡は出土遺物からみて６世紀後半から７世紀初頭に比定されるが，ＳＢ06を除く３軒は切り合い関係がなく，ごく近接して造られていることからすると，短期間の間に漸次造られたことが考えられる。平面形はすべて隅丸方形で，規模は一辺４ｍ前後である。主柱穴は４本で，上屋構造はほぼ似た状態であったと考えられる。カマドはＳＢ03にはないが，ＳＢ02，07には造付けのカマドがある。また，ＳＢ06はＳＢ08の柱穴によって切られていたが，壁際に焼土が広がっていたことからカマドがあった可能性がある。このように本遺跡では６世紀後半にカマドを有する住居跡とそうでない住居跡があることが確認された。なお，本遺跡と同時期頃の千代田町有田の城が谷遺跡[6]の住居跡は，造付けのカマドが存在せず，炉跡を伴うことから，本地域ではこの頃に造付けのカマドが導入されたことが考えられよう。

ところで，県内で当該時期の住居跡が調査された遺跡としては，三次市東酒屋町の松ヶ迫遺跡群[7]，同市大田幸町の重岡山遺跡[8]，同市十日市町の県史跡日光寺住居跡[9]，東広島市西条町の平木池遺跡[10]，比婆郡口和町の常定峯双遺跡群[11]，庄原市本村町の牛乗遺跡[12]などがある。これらの遺跡のほとんどは，各種の開発に伴う発掘調査であり，調査範囲の制約

などもあって遺跡の全容を知る例は少ない。しかし，これらの遺跡のなかで松ヶ迫遺跡群では，A，B，F，G地点で住居跡群が確認されており，一時期に数軒前後の単位で構成され，G地点を除く各地点間の移動が想定されている。また，平木池遺跡では40数軒の住居跡などが確認されており，遺跡内における居住場所，作業場所などの土地利用を想定し，一時期に数軒前後の単位で構成していたと考えられている。そして，両遺跡とも狭小な谷水田を経営基盤とするほか，鉄や須恵器生産に関わった集落の可能性が論じられている。

本遺跡は前述してきたように，調査範囲が限られていたこともあって，住居跡の総数や一時期の住居単位などについては明らかではないが，現状保存されている遺跡の北側部分に当該期の住居跡が確認されており，少くとも一時期に複数の住居で集落を構成していると考えてよいであろう。なお，本遺跡は冠川の比較的広い沖積地を望んでおり，松ヶ迫遺跡群や平木池遺跡の立地とはやや様相が異っており，水田経営を主体とした集落ではないかと考えられる。

平安時代の遺構について

当該時期と考えられる遺構にはＳＢ08の掘立柱建物跡がある。この建物跡に直接伴う出土遺物はないが，周辺の包含層中から平安時代の遺物が出土しており，他にこの時期に該当する遺構を見い出せないことから，本建物跡を当該時期と推定するのが妥当であろう。本建物跡は規模が3間×3間で，南側の1間分については庇になると思われ，規模，構造などから居住用の建物跡と考えられる。

当該時期の掘立柱建物跡の県内の確認例としては，東広島市西条町の国分寺跡東方遺跡群[13]，甲奴郡上下町の下郷桑原遺跡[14]などがある。しかし，いずれも調査範囲が限られていることもあって遺跡の全容は明らかでない。本遺跡では，調査を行った南半分に1棟のみである状況からすると，現状保存の北半分に1～2棟存在するとしても，集落跡としては小規模といえよう。本遺跡のような立地や集落規模が一般的であるのか，否かについては今後の調査例の増加に期したい。

本遺跡が所在する有田地区は，倭名類聚抄にある古代の山県郡山県郷に比定されている八重地区と同郡品治郷に比定されている[15]本地地区のほぼ中間に位置している。古代にあってはどちらの郷に属していたのかは明らかではないが，今後，当地域において当該時期の遺跡が存在していることが推測される。とくに，郡家の所在地で「古保利」名を伝える八重地区には，平安時代初期に大寺院（福光寺廃寺）のあったことが薬師像の存在によって知られており，当地域における今後の調査が期待される。

註

(1) 横路遺跡調査団『横路遺跡』 昭和57(1982)年

(2) 広島県教育委員会「高蜂遺跡」『緑岩古墳 ―三次地区工業団地第2期造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査―』 昭和58(1983)年

(3) 福岡県教育委員会「野黒坂遺跡」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』(1) 昭和55(1970)年

(4) 福岡県教育委員会「三沢蓬ヶ浦遺跡」『福岡県文化財調査報告書』第56集 昭和59(1984)年

(5) 広島県教育委員会「塚迫遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 昭和57(1982)年

(6) 広島県教育委員会『城が谷遺跡群 ―石田工業工場用地造成にかかる―』 昭和48(1973)年

(7) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告 ―三次工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査―』 昭和56(1981)年

(8) 重岡山遺跡発掘調査団『重岡山遺跡発掘調査報告』 昭和55(1980)年

(9) 松崎寿和・潮見 浩「古代農村の復元 ―広島県三次盆地を中心として―」『広島の農村』 昭和30(1955)年

(10) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『平木池遺跡発掘調査報告』 昭和57(1982)年

(11) 広島県教育委員会「広島県比婆郡口和町常定峯双遺跡群の発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第7集 昭和42(1967)年

(12) 広島県教育委員会「牛乗遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 昭和53(1978)年

(13) 広島県教育委員会『安芸国分尼寺跡 ―伝承地にかかる第3次調査概報―』 昭和55(1980)年

(14) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『下郷桑原遺跡』 昭和59(1984)年

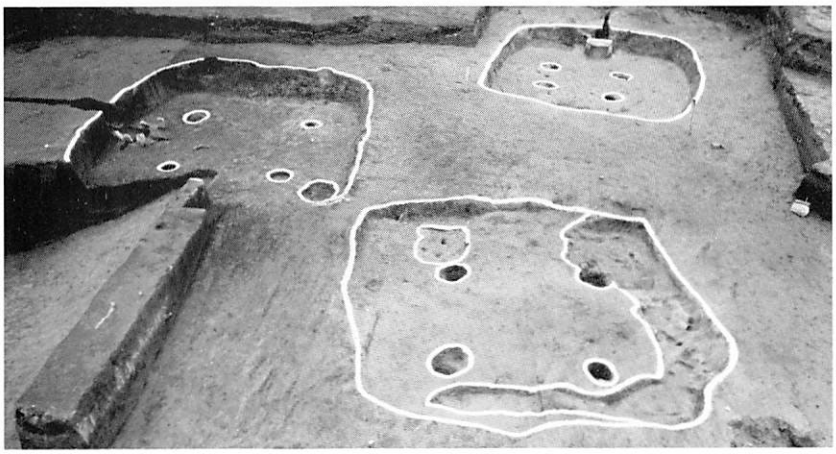
(15) 福尾猛市郎「V二. 地方改治の展開」『広島県史. 原始古代』広島県 昭和55(1980)年

a．遺跡遠景
（北西から）

b．調査状況
（南から）

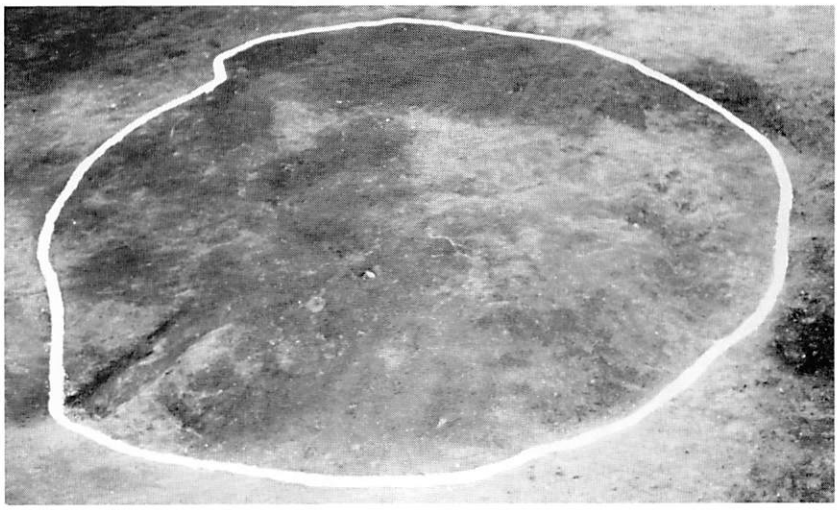
c．同上
（北から）

a．調査後全景
（北東から）

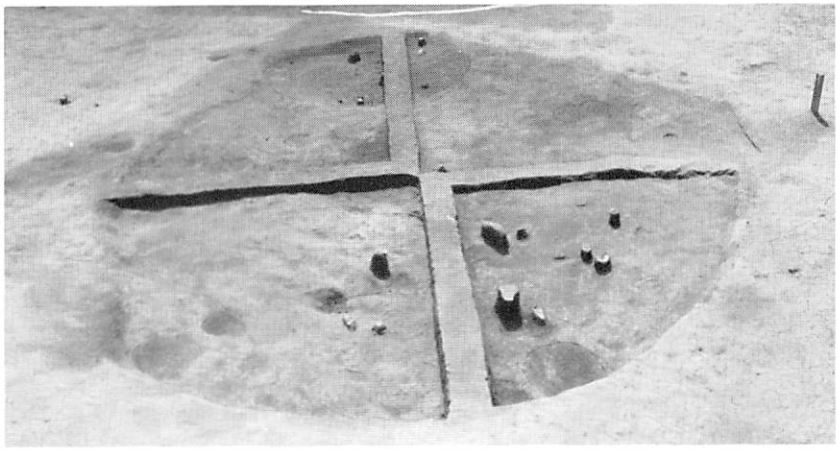


b．ＳＢ02・03・07
完掘状況
（西から）

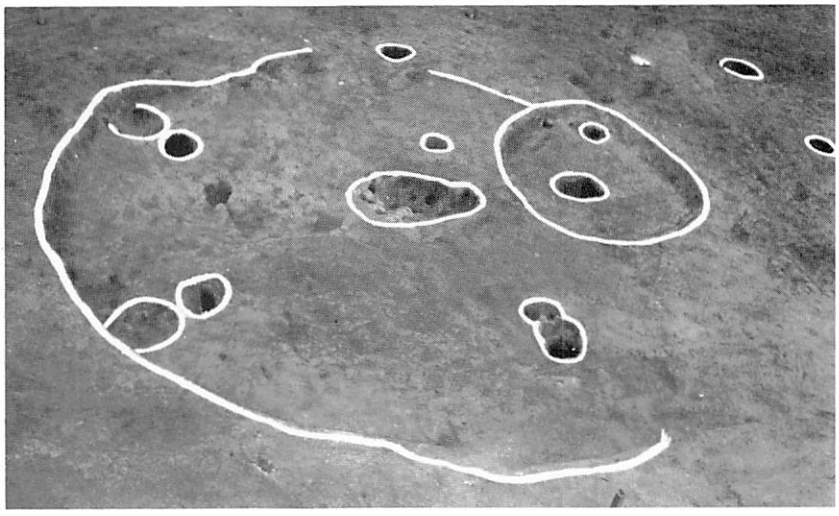
c．調査区北東部
完掘状況
（南から）



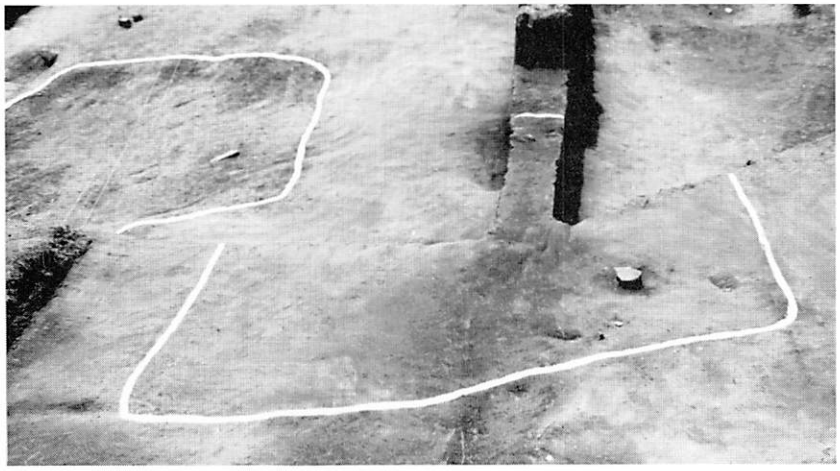
a．SB01
検出状況
（東から）



b．同上
調査状況
（東から）



c．同上
完掘状況
（北から）

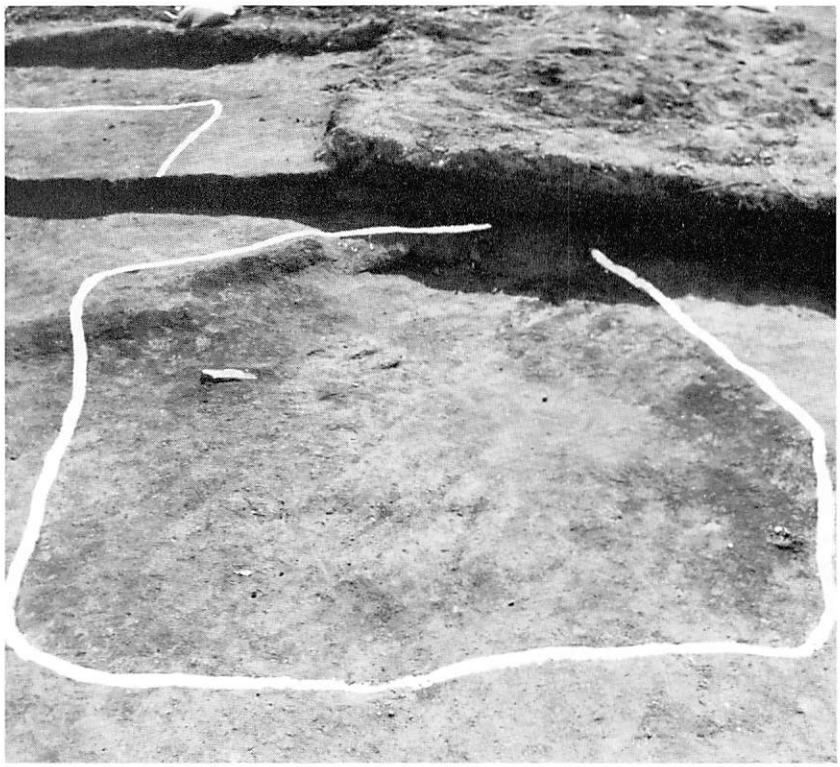


a．ＳＢ02
検出状況
（東から）

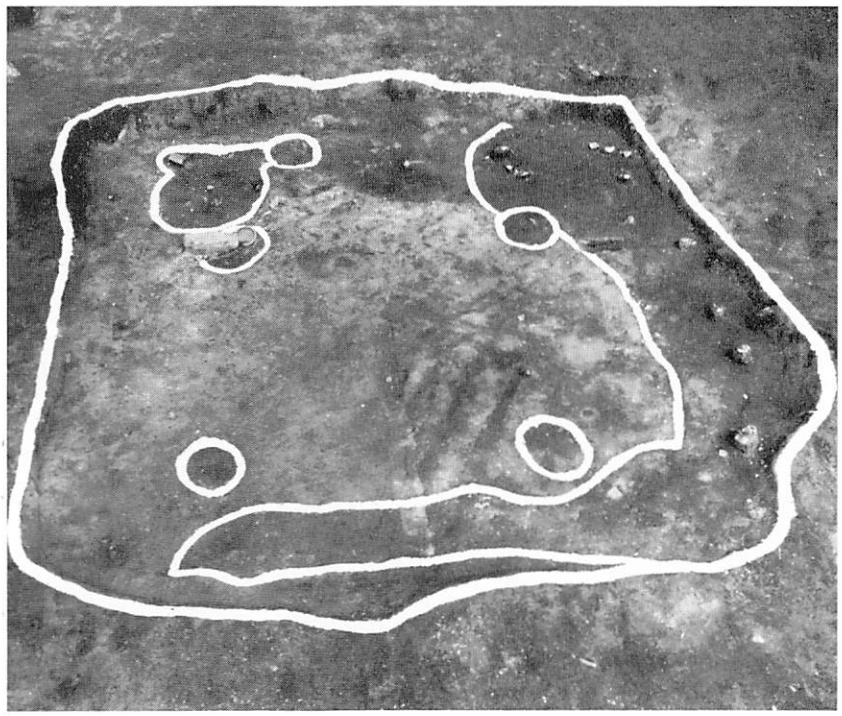
b．同上
完掘状況
（南から）

c．同上
カマド検出状況

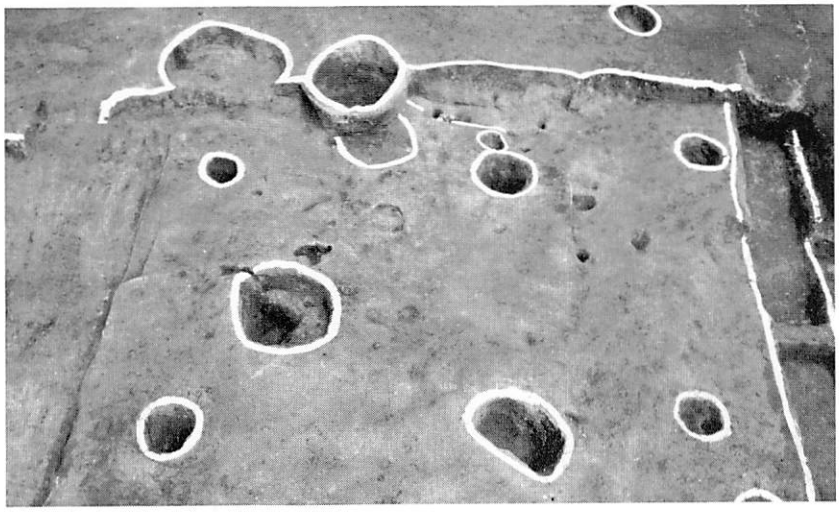
d．同上
完掘状況
（南から）



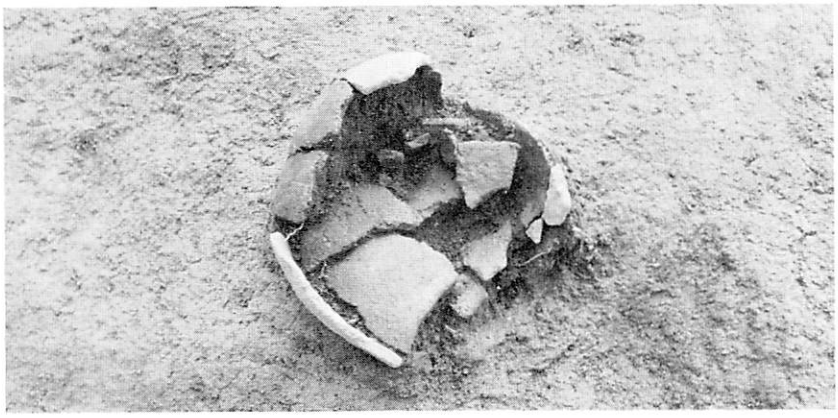
a．SB03
検出状況
（西から）



b．同上
完掘状況
（西から）



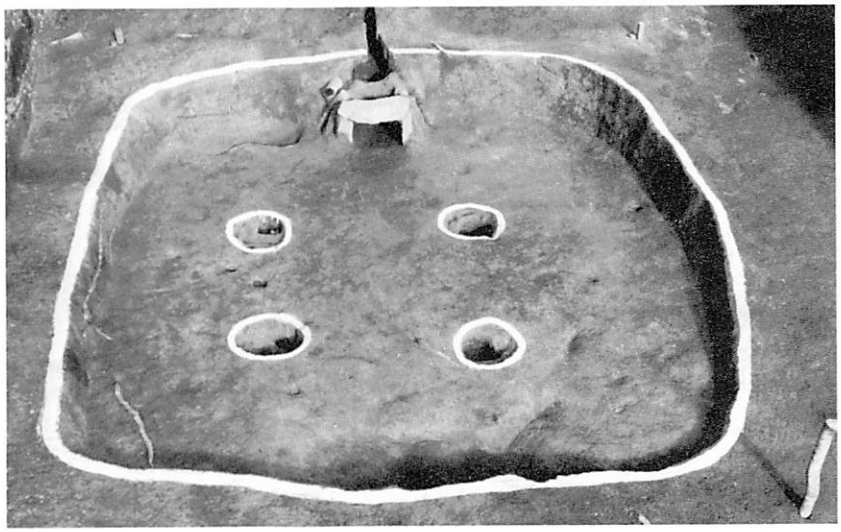
a．SB06
完掘状況
（西から）



b．同上
土器出土状況

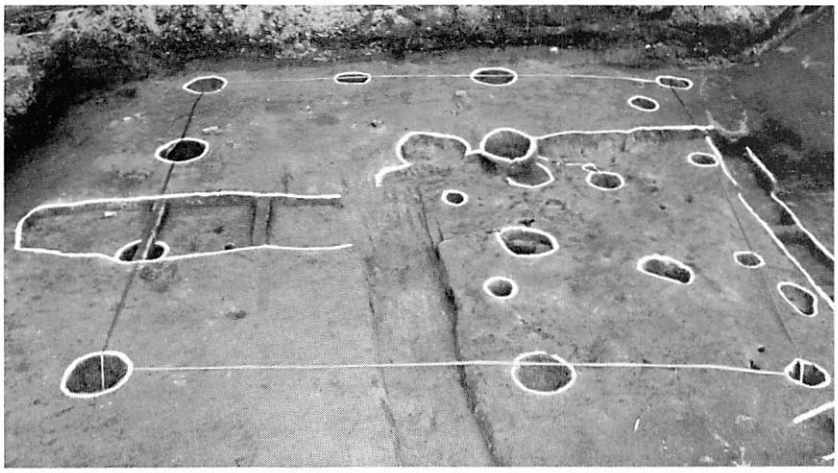
c．同上

a．SB07
調査状況

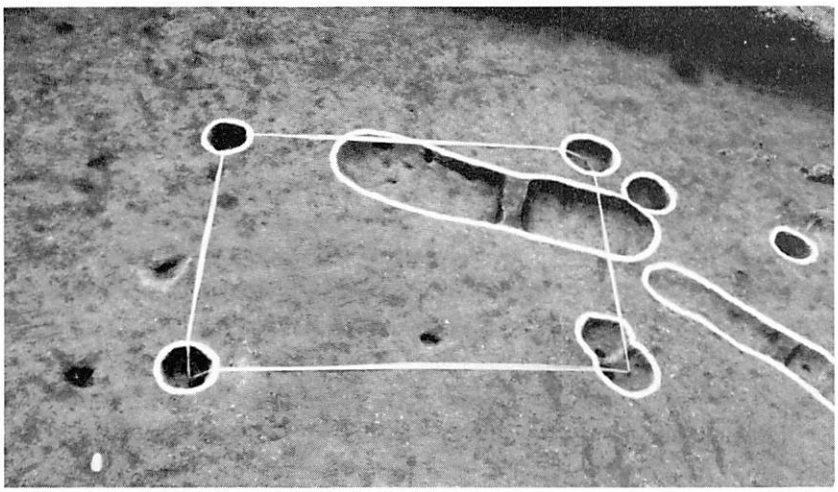


b．同上
完掘状況
（西から）

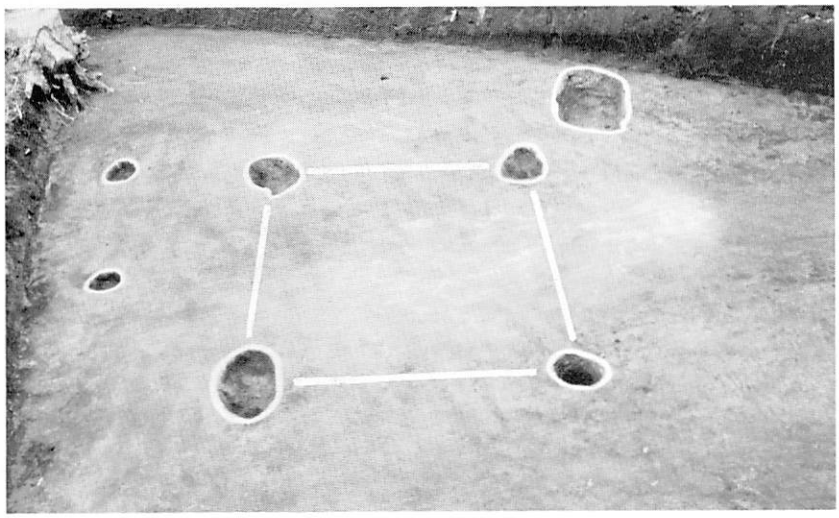
c．同上
カマド検出状況
（西から）



a．SB08
完掘状況
（西から）



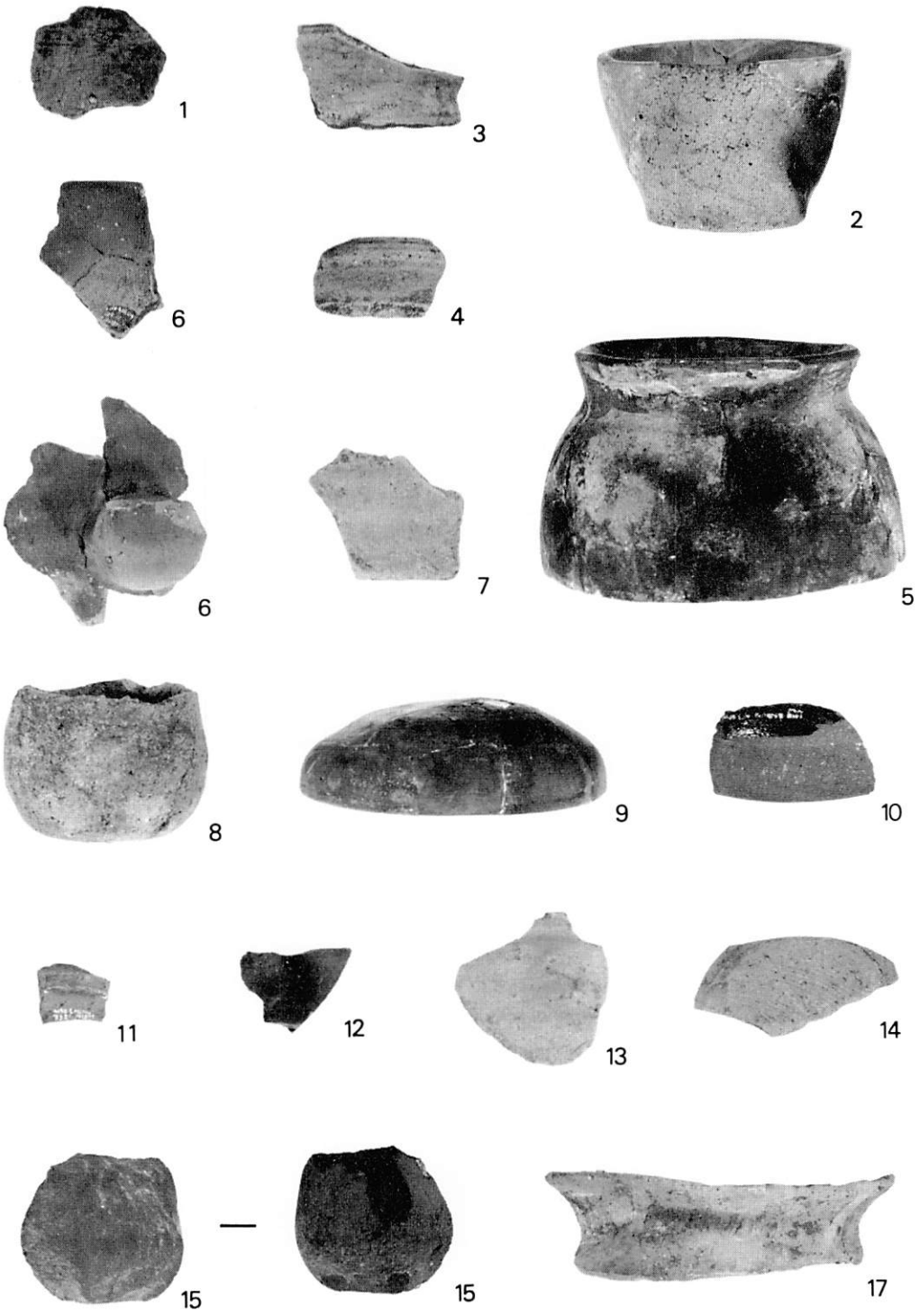
b．SB09
完掘状況
（東から）



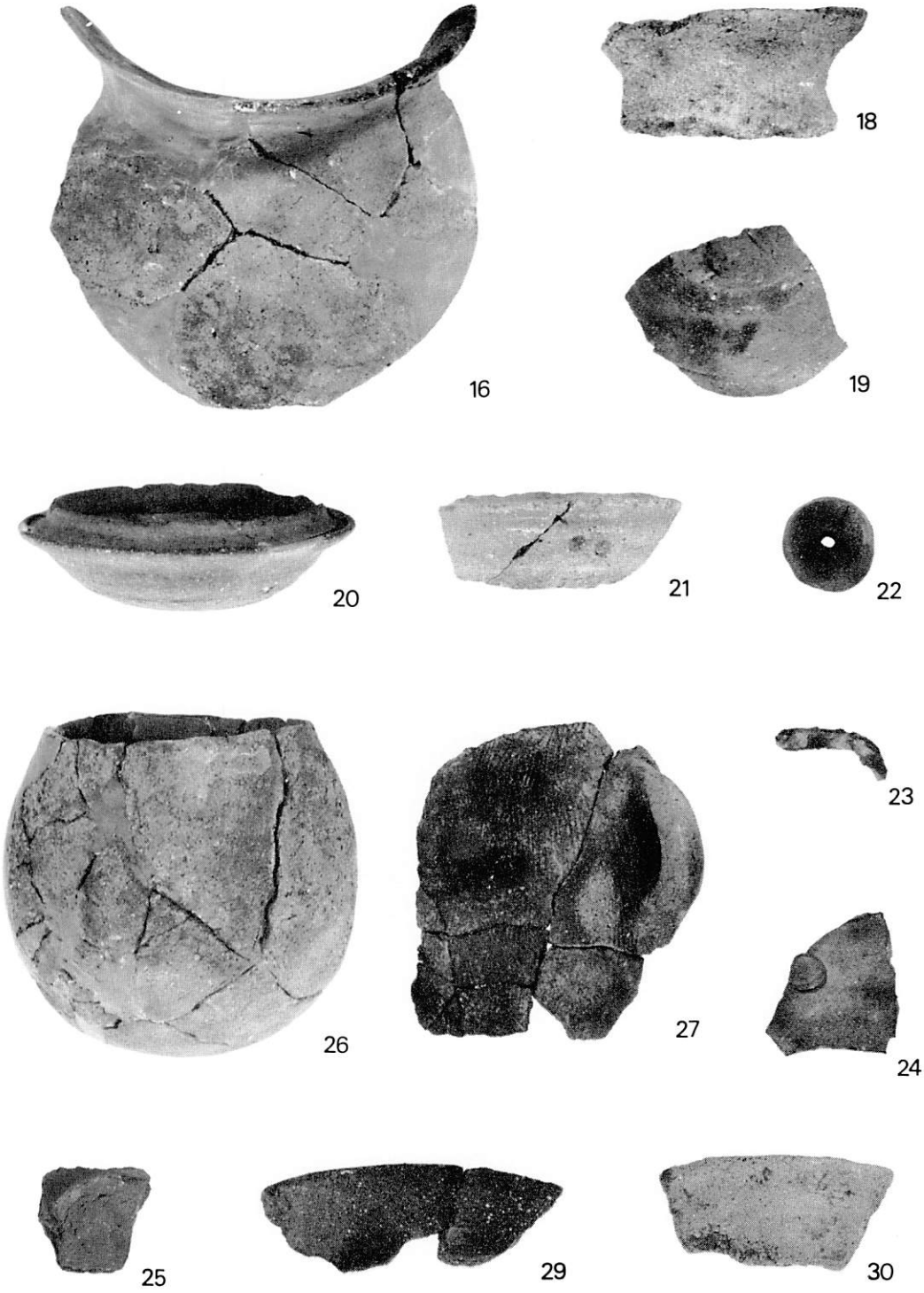
c．SB10
完掘状況
（東から）

a．SB05
完掘状況
（南から）

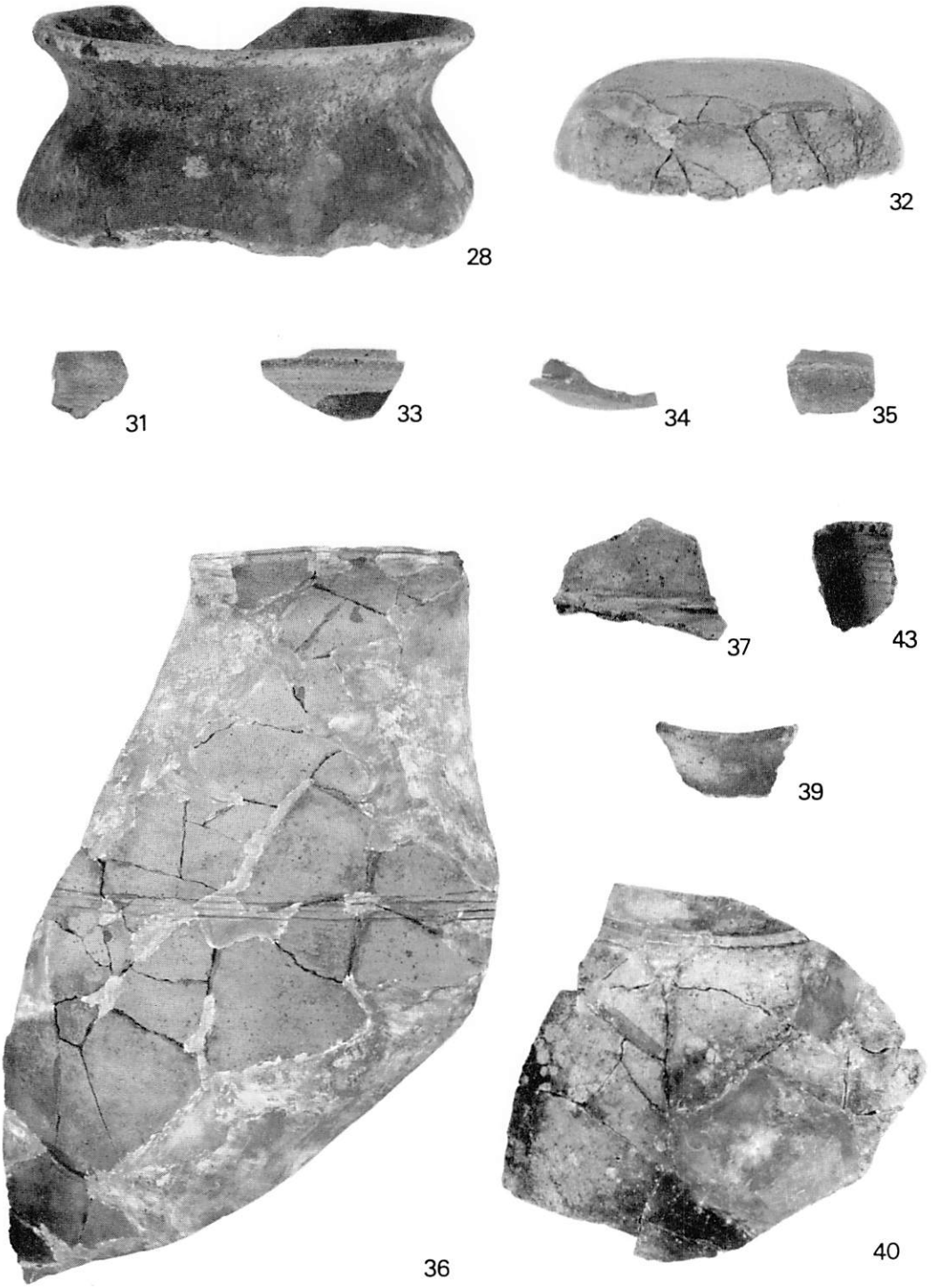
b．SK04
土器出土状況
（西から）



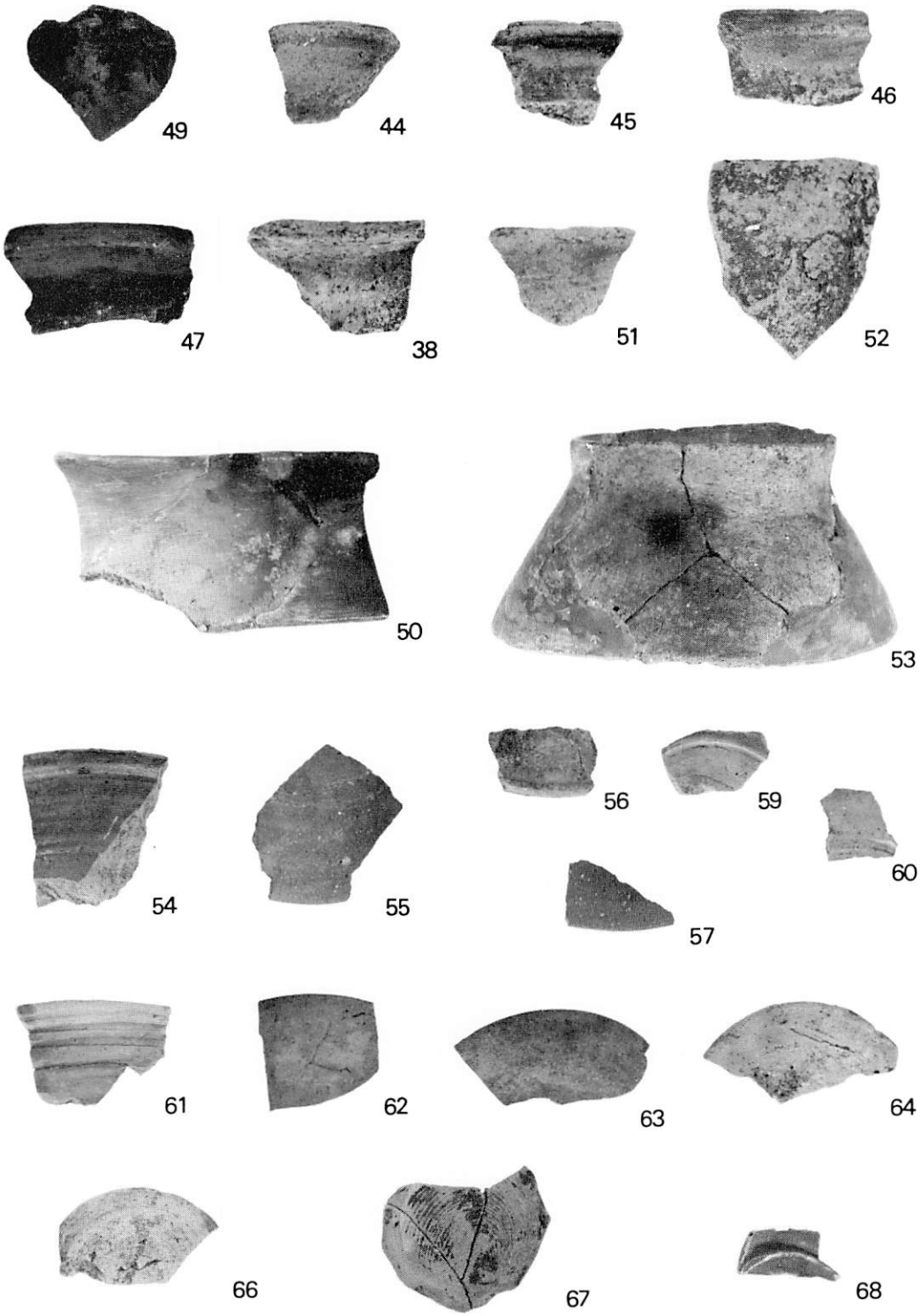
出土遺物（I）



出土遺物（II）



出土遺物（III）



出土遺物（IV）

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第50集

青木原(あおきばら)遺跡発掘調査報告書

発　行　　昭和61(1986)年3月

編集・発行
財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター
733 広島市西区観音新町4丁目8－49
TEL (082) 295－5751

印　刷
電子印刷株式会社